

一概要

大正中期以降の増床要求に対応し、既に震災前に正門地区の広場の中に建設する計画（列品館、法研）に着手する。工・2はほぼ竣工し、大講堂、列品館も工事中に大震災が発生する。震災後は震災前の計画で示されていたシステムに則り、一挙に全体を計画する。この全体計画は、内田祥三により震災発生から約1,2カ月でその骨格が決められている。この全体計画は、その後昭和30年代まで構内の空間的な変容を規定する。

一実際の展開

図3-40,41（下）⁴⁵

一戦前

T12（後期）～T15

工2号（T13.3.）、大講堂（T14.6.）、列品館（T14.3.）、薬・西館（T14.3.）、龍岡門夜間診療所（T15.1.）、農1号（T15.8.）

S2,3

法研（S2.3.）、工4号（南側 S2.2.）、理学部1号（T15.3.）、図書館・史料編纂所（S3.11.）、地震研（S3.3.）

S7

法文1号（西側 -S4.2.）、法文2号（東側 S4.3.）、工4号（北側 S5-S7）

工ボイラー（S5.8.）等、医学1号（S6.2.）、理学2号（S9.9.）

S13

工1号（S4.5.-S10.8.）

法文1号（東側～S10）、法文2号（～S12.）、医学2号（S11.11.）、農2号（S11.2.）、二食（S9.3.）、七徳堂（S13.6.）、弓道場（S10.6.）、船舶水槽（S12.10.）、運動場下厚生部付属室（S8.3.）、野球場（S12.3.）

S16-17

工3号（S14.9.）、工6号（総合試験場）（S15.9.）、農3号（S16.5.）

一戦後

S33

理学1号北側（S34.3.）、新聞研（S27.～）、教育（S30.～）、薬学（S33.～）、工・航空（S34.3.）、冶金新館（S34.3.）

一震災以前

図3-22'25

内田が震災以前に計画・設計し、基本的にその通り実施された建物としては、工学部2号館の他、大講堂（大正12年2月大講堂建築実行部建築掛長、着工；大正11年12月25日同14年6月30日竣工）列品館（大正12年6月30日着工同14年3月31日竣工）法研（大正13年2月着工昭和2年3月竣工）などが挙げられる。

単に建築型の変化というのではなく、建築型を含めた構内全体の空間編成に関する新しい方法の形成を時期の区分の基準と考えるなら、内田期は、工2号館ではなく安田講堂および正門一帯の広場（大前庭）に列品館、法研を相次いで計画した時点から始まるとしえよう³¹。工学部2号館は表裏のある平面形をもち、内田期の全体計画で見られる建築と異なる。

安田講堂も2号館も実質的に内田以前にその配置が事実上決まっていたと思われる。列品館以降の計画で、内田は草創期以来40年近くにわたって維持されてきた正門一帯の広場の開発に着手し、広場と街路の関係を一変してゆく。

その背景として、大正8,9年頃、この広場に建設することに関し学内で議論あったことにおおむね記事がある³²。その記事から判断すると、何らかの広場内の建築計画がT8,9年に既にあったことが想像される³³。事実、当時の工科大学本館正面の左手前の広場の一角に（大正9年頃）航空学仮教室が建てられている。学内の増床要求は広場に手を付けざるを得ないところまできていたと思われる。³⁴

一内田計画

震災前に法研以降の計画について計画が存在したかどうかは不明である。ただ、明治期の法文校舎、図書館などを前提として列品館、法研の計画は建てられており、内田が法研以降の具体的な立案をしていなかった可能性は大きい。しかし、次にみるよう、震災後の全体計画は即座に立てており、頭の中では草創期以来の建物を順次立て替えてゆく構想はあったのかもしれない。

内田計画案

図3-26'35

震災直後1,2カ月で3案を立案（大正12年10月に二案,11月に一案 主に病院部分変更）³⁵。便宜のため、10月の二案を各々A,B案とし、11月の案をC案とする。骨格は実施案にきわめて近い。最も大きく異なるのは病院。他は現図書館部分、農学部弥生地区、それに現医学部1号館、理学部2号館のあたりである。

A,B,C案と比較すると実施案は正面と背後のオープンスペースをへだてる二領域型が激増している。AないしはC案をベースに計画した可能性がある。

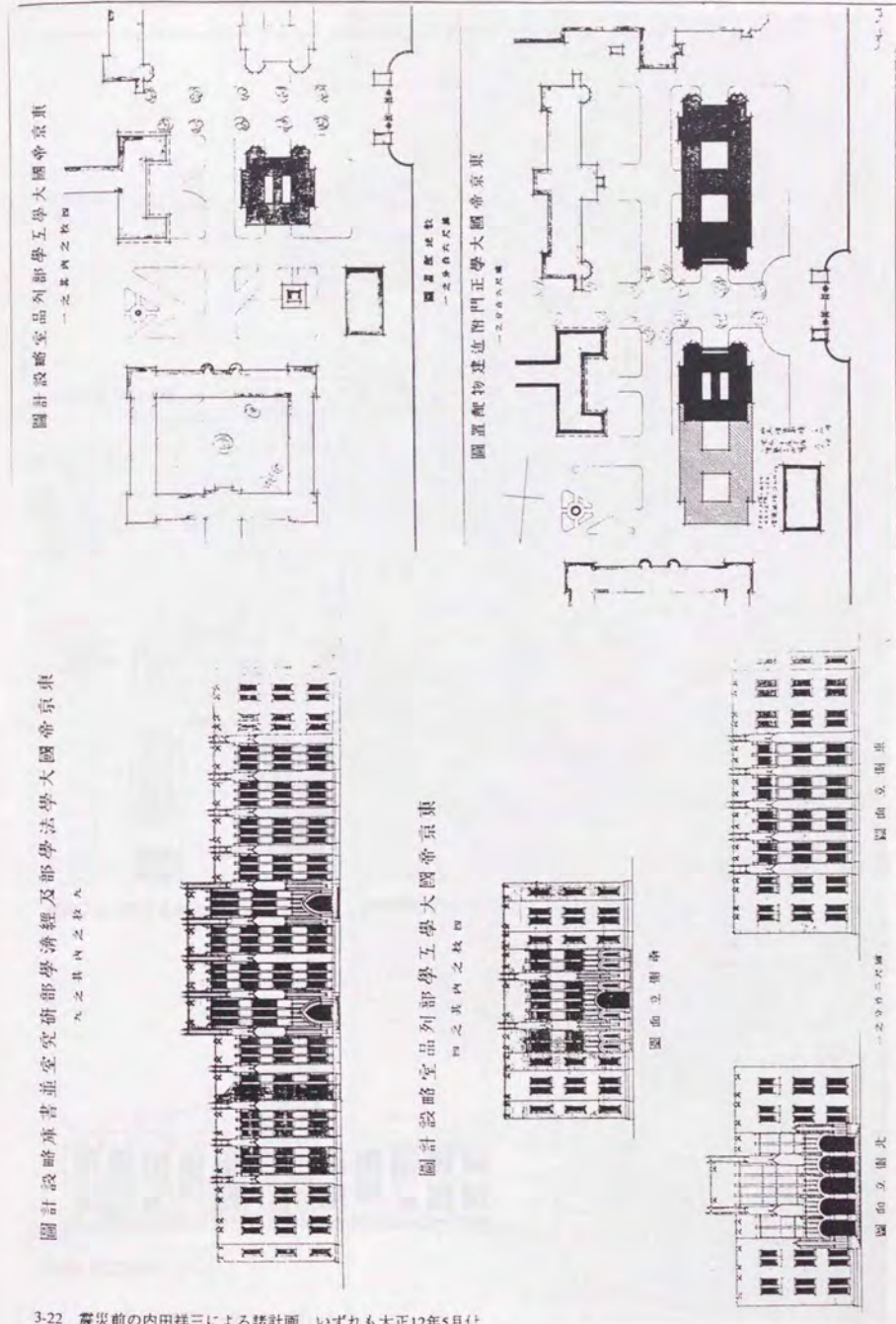
建築型はA,B,Cとも病院以外二領域型は見られない。T1301の復旧計画案では二領域型が激増している。（医、農、理、法文、医院）

オープンスペースについては、A,B,C案ではグリッド状の直線街路の徹底した体系と「都市公園」か前庭の組み合わせである。「都市公園」とは街区に建物を置く代わりに植栽を施したようなもの。前庭とは軸の突き当たりの建物の前面左右に、建物寄りに置かれた植栽の施されたオープンスペースのこと。B案では交差点でロータリー様の植栽が使われるが、徹底していない。交差点のロータリーは二食前のみに残る。

岸田油彩画は病院や工学部1号館の形態が実施案に近いのでA,B,C案より遅いものであることは確実である。これまで昭和10年代とされていたが、遅くともS06頃までに完成していた³⁶。A,B,C各々に近い点があるが、病院や農学部についてはA案に近い。

新しい大学の基本要素—図書館、陳列館（博物館）、講堂—の計画が立てられ、大講堂に向かって左に博物館（現法文1号の建物）、右に図書館（現法文2号の建物）を配置しようとしたが、法学部の反対に遭い、列品館にのみその名残りが残る³⁷。

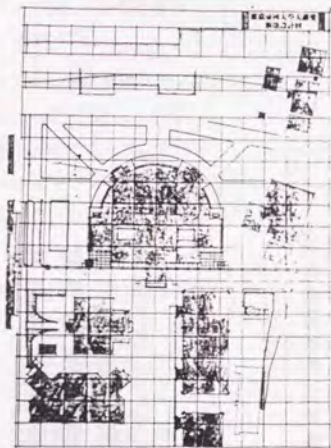
戦後は基本的に内田の計画に則り、街区型建築で未完の部分の補填するなどしてゆく。



3-22 震災前の内田祥三による諸計画 いずれも大正12年5月付



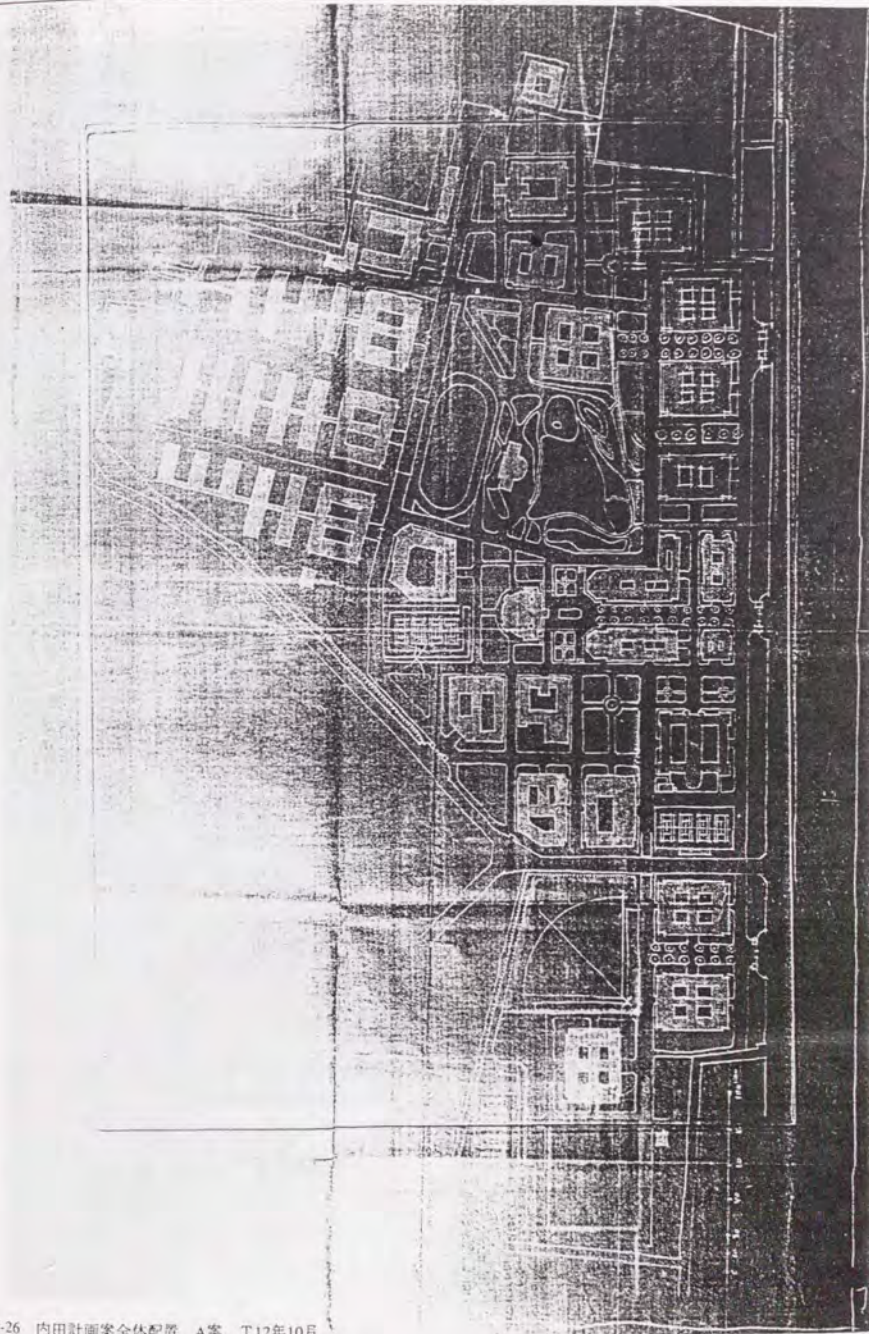
3-23 同上、正面奥に大講堂、左右手前は列品館と法学部研究棟
中間左右に明治期の旧法文校舎が見える



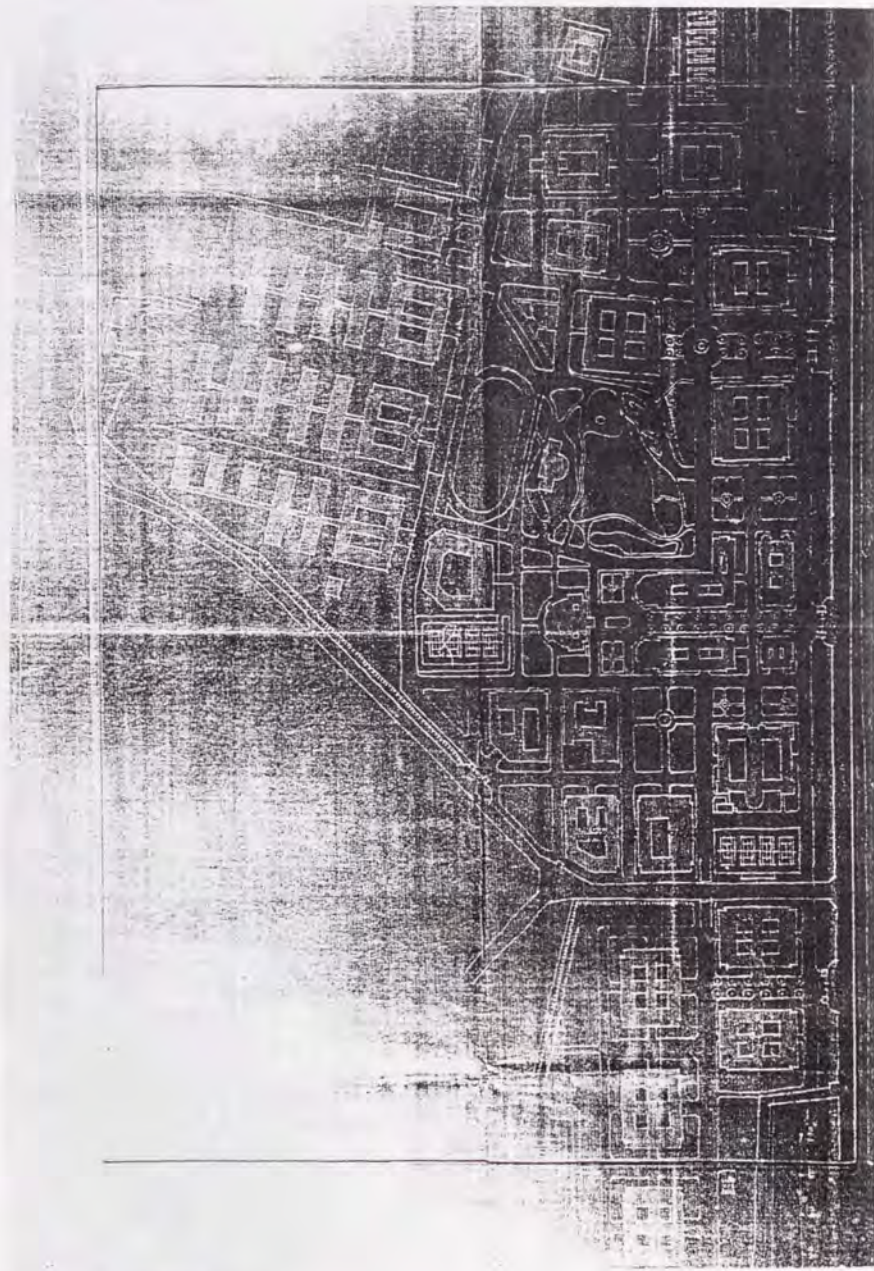
3-24 大講堂配置、T11 明治期の法教室群を前提とする配置



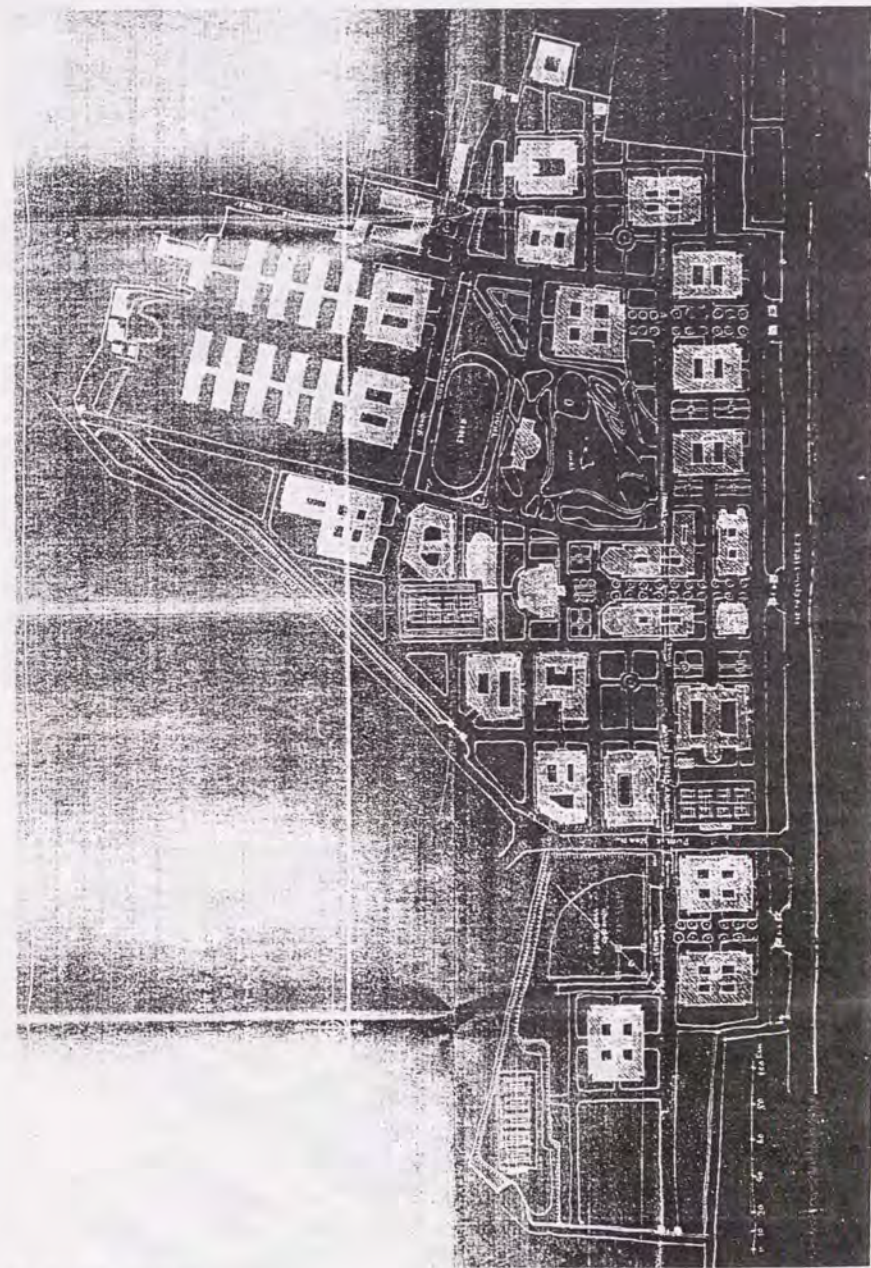
3-25 大講堂立面初期案



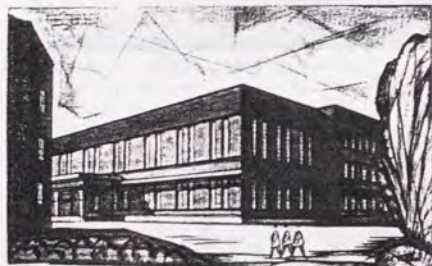
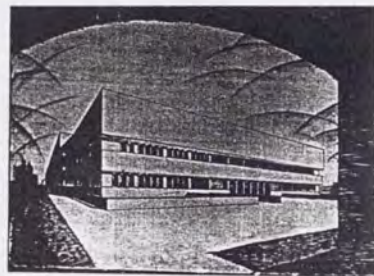
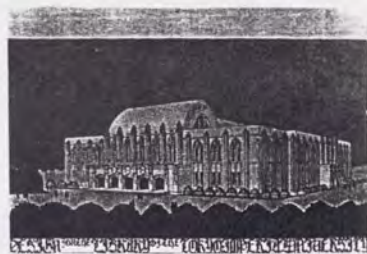
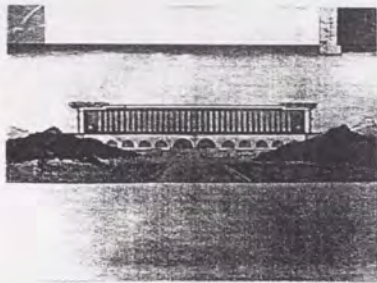
3-26 内田計画案全体配置 A案、T12年10月



3-27 同 B案、T12年10月



3-28 同 C案、T12年11月



3-32 図書館検討案、T14項か
左最上段は堀口捨巳署名あり、最下段は内田案

東京帝國大學法、文、經濟學部教室略設計圖

七枚之内其之一

配景圖

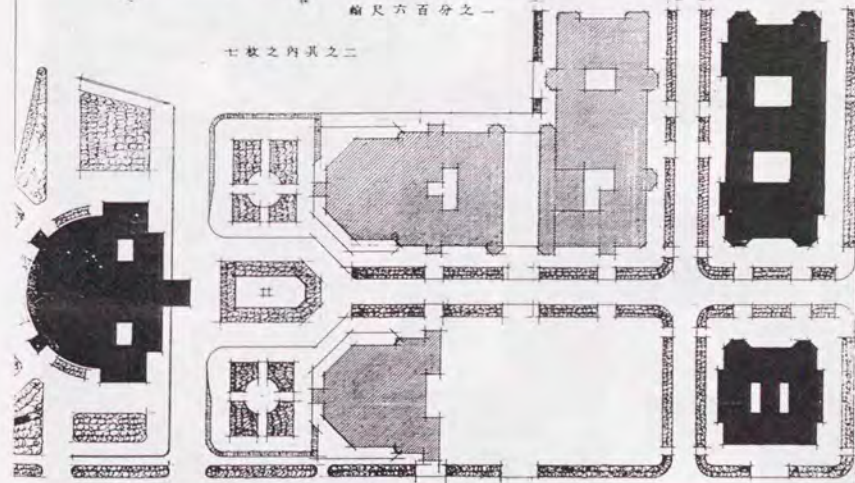


3-33 東京帝國大學法、文、經濟學部教室略設計圖、T.14.5.

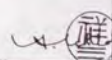
東京帝國大學法、文、經濟學部教室略設計圖

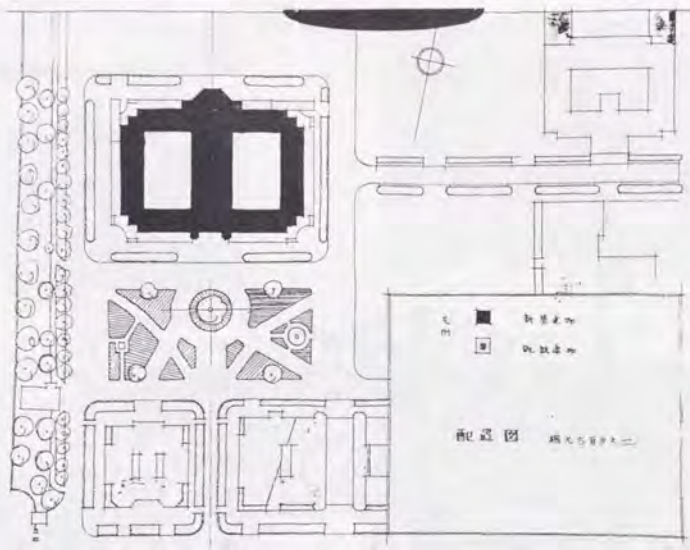
縮尺六百分之一

七枚之内其之二

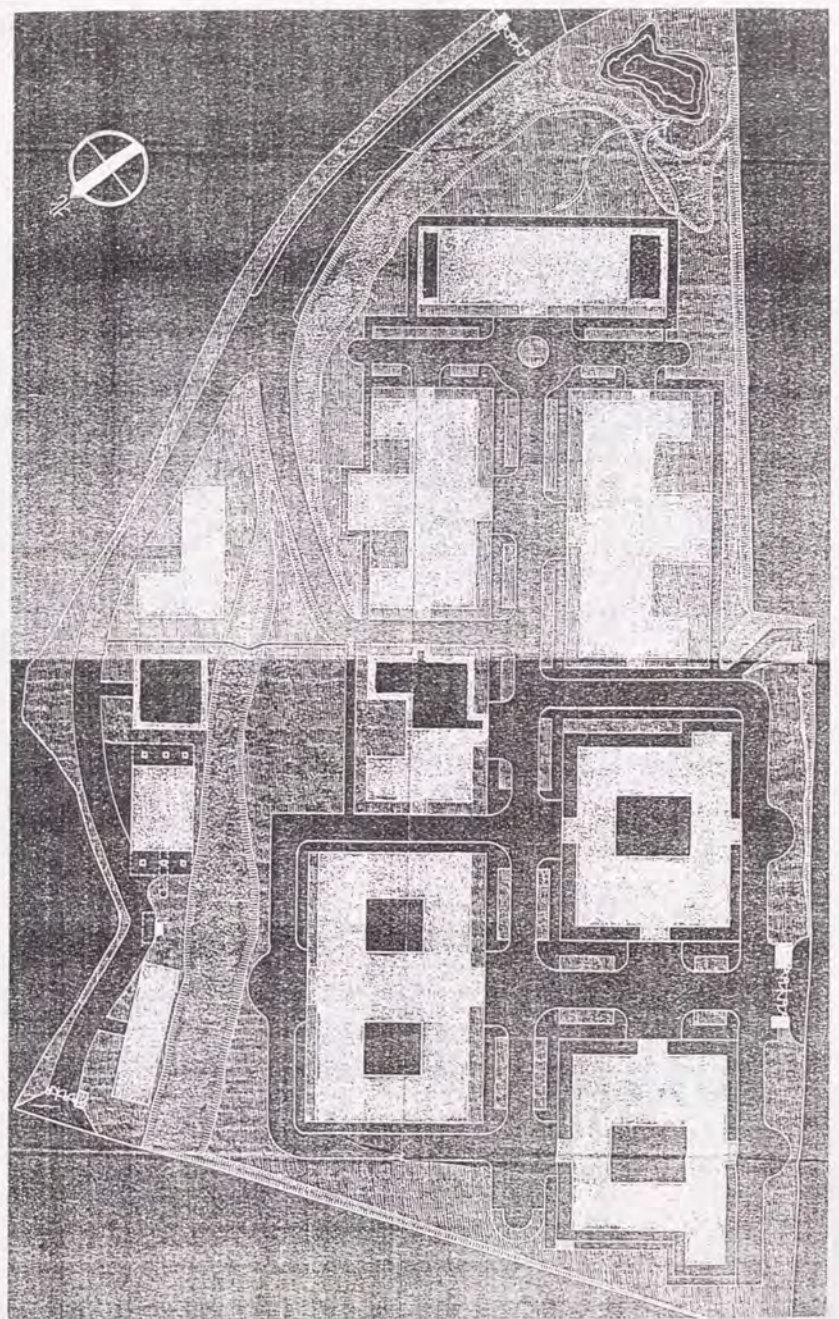
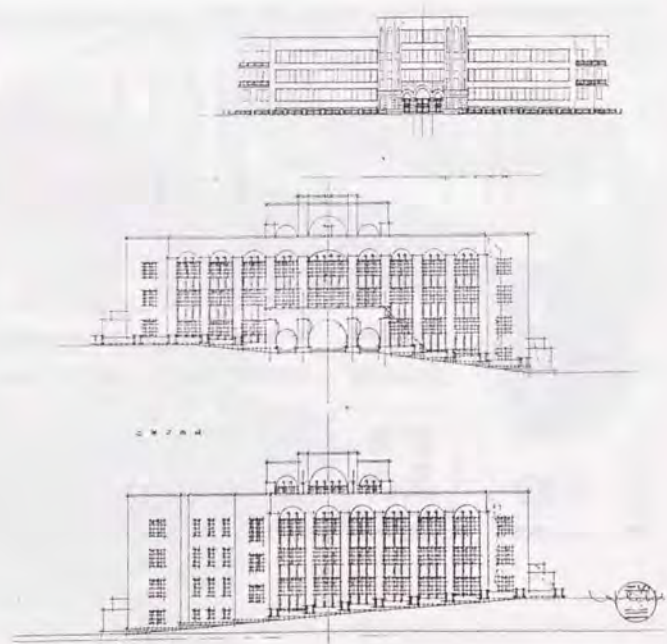


配景圖





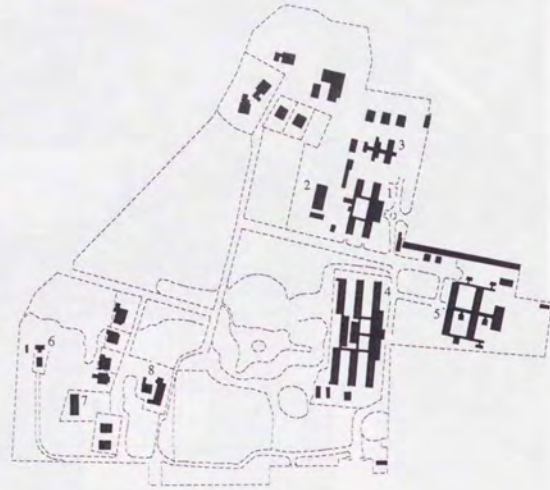
3-34 同工1号 (S.3.9) . 4号館配置と立面図 (T.15.5.~S.3.4.訂正) 1号館立面は検討案の一つ



3-35 浅野地区全体計画図, S10年代か

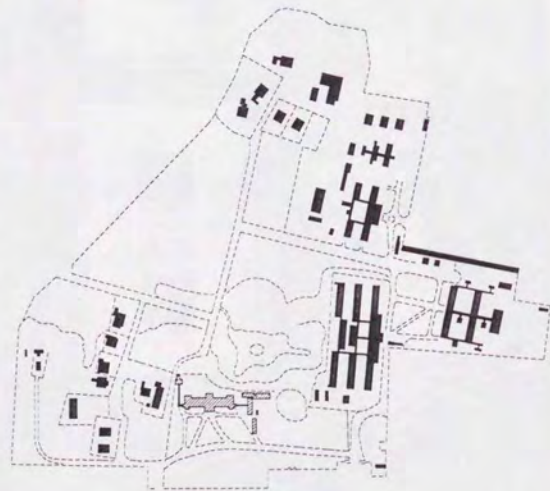
- 既存建物
- ▨ 新築建物
- 計画建物、建設中建物

- 1 大学事務室
- 2 医・解剖
- 3 医・製薬
- 4 第一医院本室
- 5 客宿舎
- 6 理・天象台
- 7 理・气象台
- 8 音楽取調所



明治16年

1/7,500



明治17年

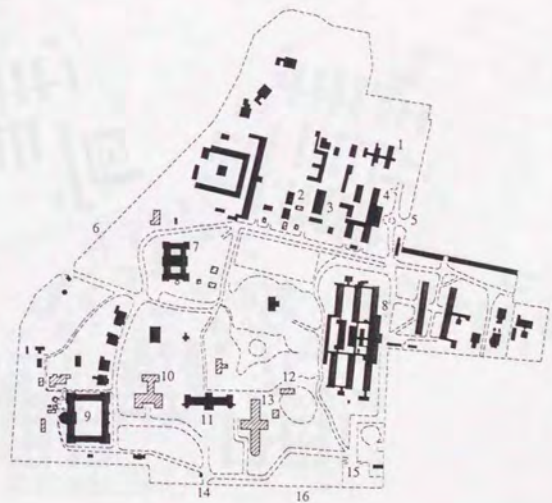
1/7,500



明治21年

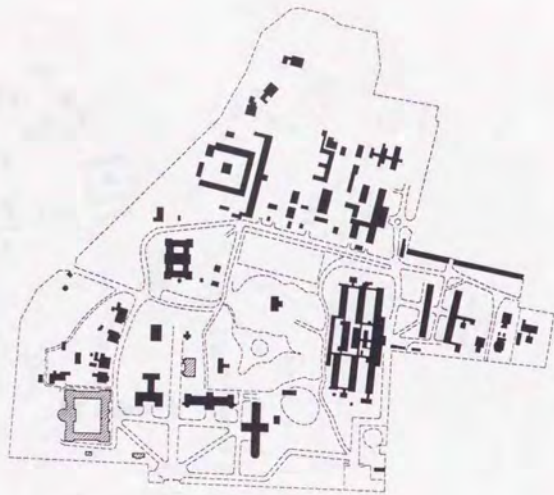
1/7,500

- 1 医・製薬
- 2 医・病理
- 3 医・解剖
- 4 大学事務室
- 5 鉄門
- 6 弥生町通り
- 7 理・本館
- 8 第一医院本室
- 9 工・本館
- 10 理・博物
- 11 法・本館
- 12 文
- 13 図書室
- 14 仮正門
- 15 赤門
- 16 本郷六丁目通り



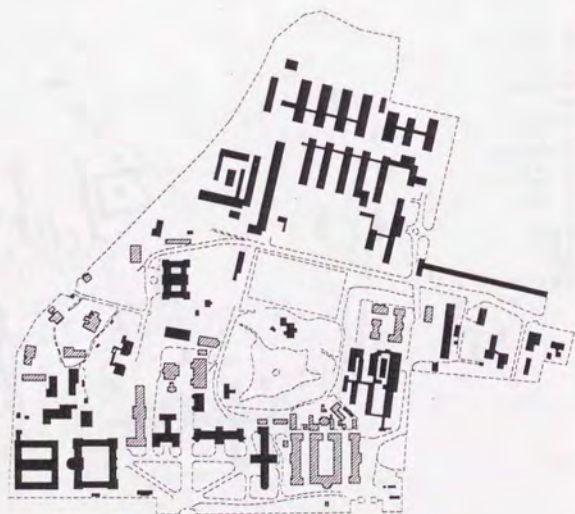
明治27年

1/7,500



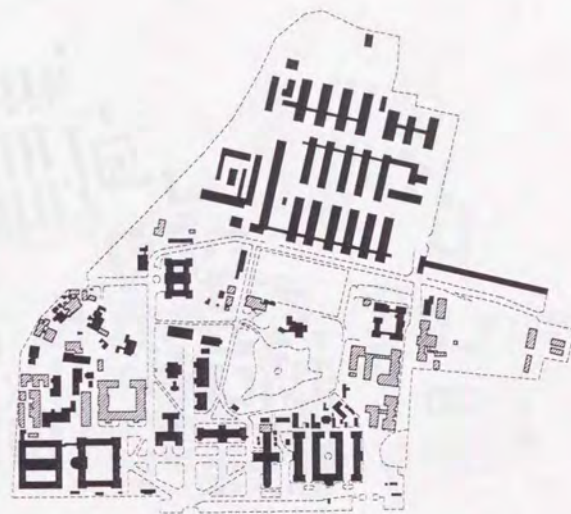
明治28年

1/7,500



明治36年

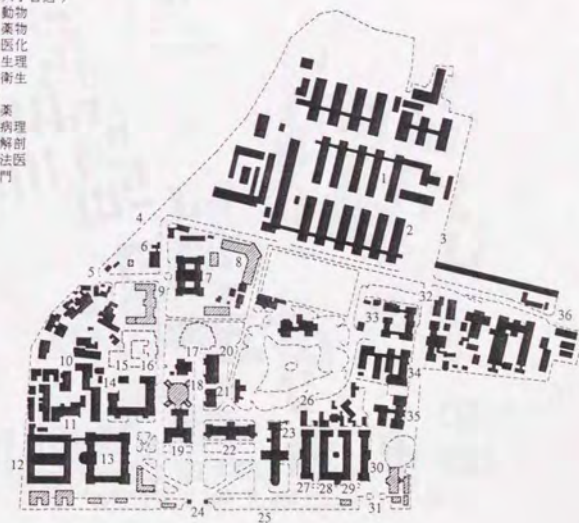
1/7,500



明治40年

1/7,500

- | | |
|----------------|------------|
| 1 医・外科 | 23 図書館 |
| 2 医・内科 | 24 正門 |
| 3 鉄門 | 25 本郷六丁目通り |
| 4 弥生町通り | 26 医・動物 |
| 5 第二通用門 | 27 医・薬物 |
| 6 理・地質 | 28 医・医化 |
| 7 理・本館 | 29 医・生理 |
| 8 理・化 | 30 医・衛生 |
| 9 理・動物、地質、鉱物 | 31 赤門 |
| 10 工・機械 | 32 医・美 |
| 11 工・機械 | 33 医・病理 |
| 12 工・応用化学、探鉱冶金 | 34 医・解剖 |
| 13 工・本館 | 35 医・法医 |
| 14 工・電気 | 36 南新門 |
| 15 工・土木 | |
| 16 工・造船、造兵 | |
| 17 法・講堂 | |
| 18 法・講堂 | |
| 19 法・文 | |
| 20 法・文 | |
| 21 法・文 | |
| 22 法・文 | |



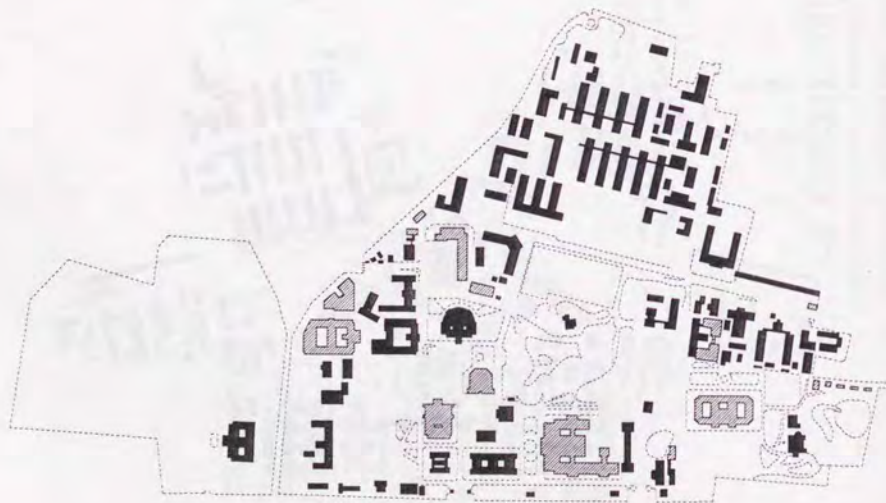
大正12年前期

1/7,500



大正12年後期

1/7,500



昭和7年

1/7,500



昭和16年

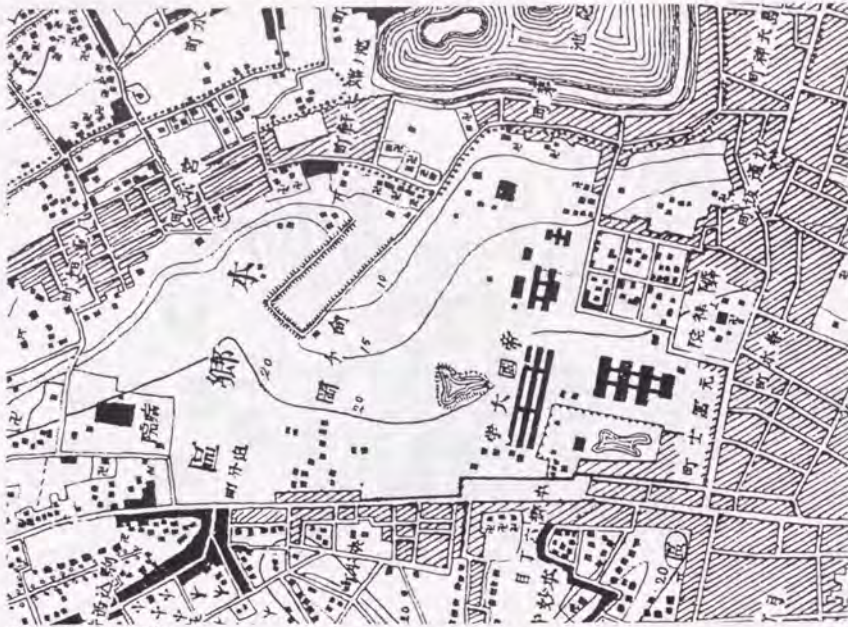
1/7,500

- | | | | |
|----------|-----------|-----------|----------|
| 1 池ノ端門 | 15 工・3号館 | 22 列品館 | 29 薬 |
| 2 附属病院 | 16 工・4号館 | 23 法文・2号館 | 30 竜岡門 |
| 3 理・地球物理 | 17 工・2号館 | 24 法経・研究室 | 31 医・1号館 |
| 4 第一工 | 18 工・船舶水槽 | 25 正門 | 32 営繕課 |
| 5 学生食堂 | 19 工・1号館 | 26 図書館 | 33 赤門 |
| 6 弥生門 | 20 大講堂 | 27 医・法医 | 34 理・2号館 |
| 7 理・1号館 | 21 法文・1号館 | 28 医・本館 | 35 懐徳館別館 |
| 8 理・化学 | | | |
| 9 理・地震 | | | |
| 10 家畜病院 | | | |
| 11 農・3号館 | | | |
| 12 農・2号館 | | | |
| 13 農・3号館 | | | |
| 14 農学部正門 | | | |



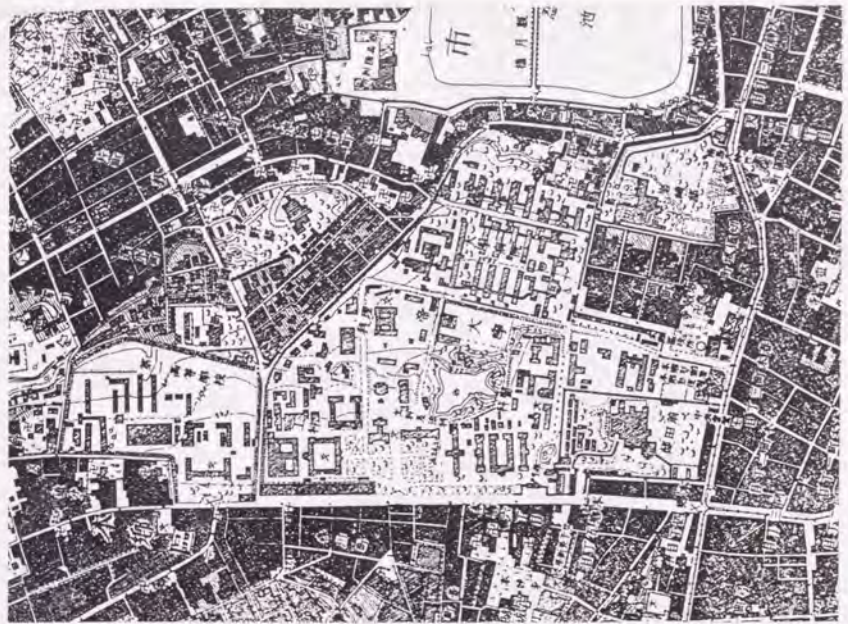
昭和33年

1/7,500



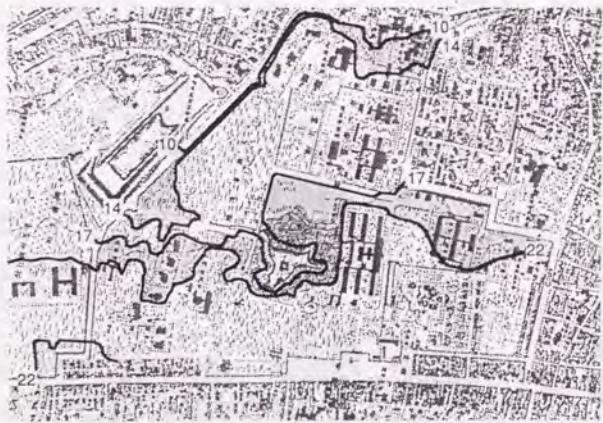
明治13年／周辺環境

1/10,000



明治42年／周辺環境

1/10,000



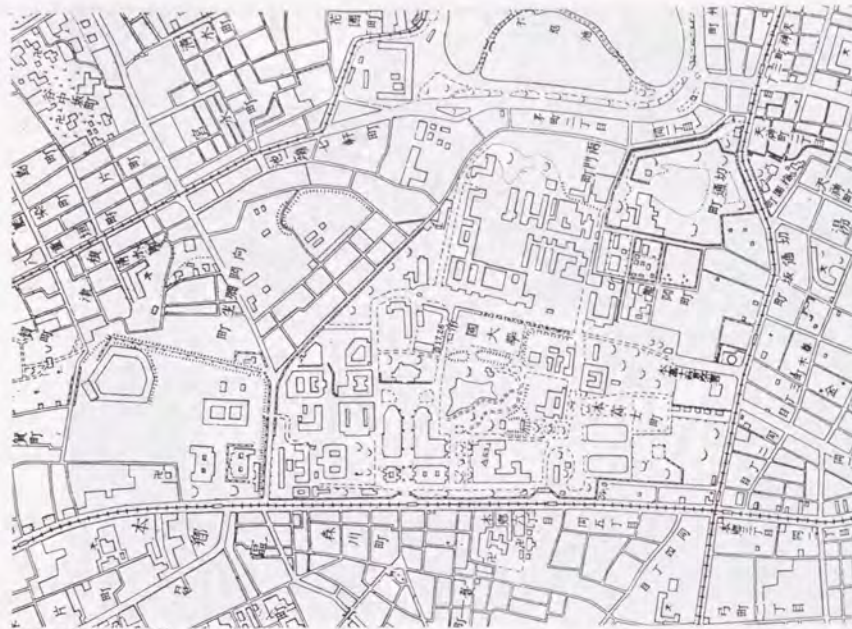
明治16年／地形

1/10,000



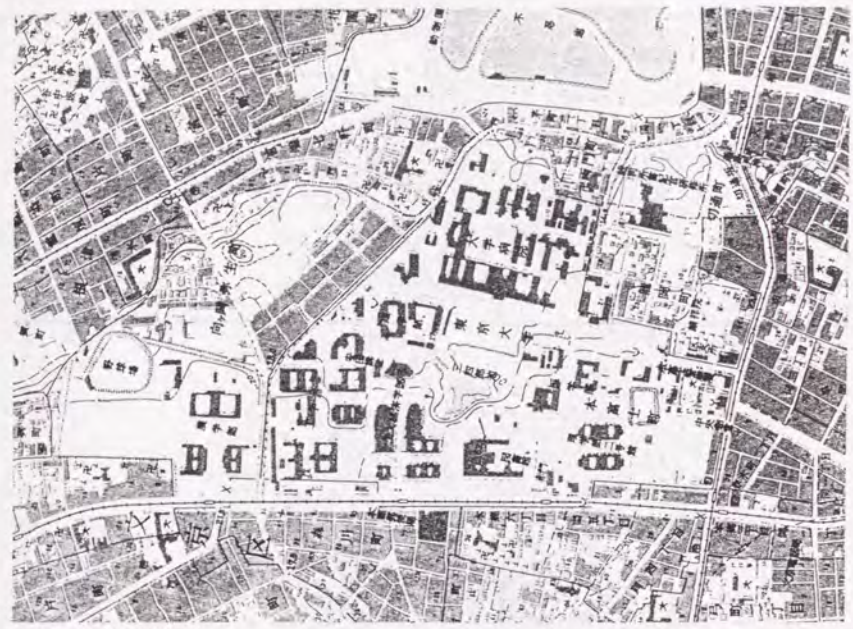
昭和12年／周辺環境

1/10,000



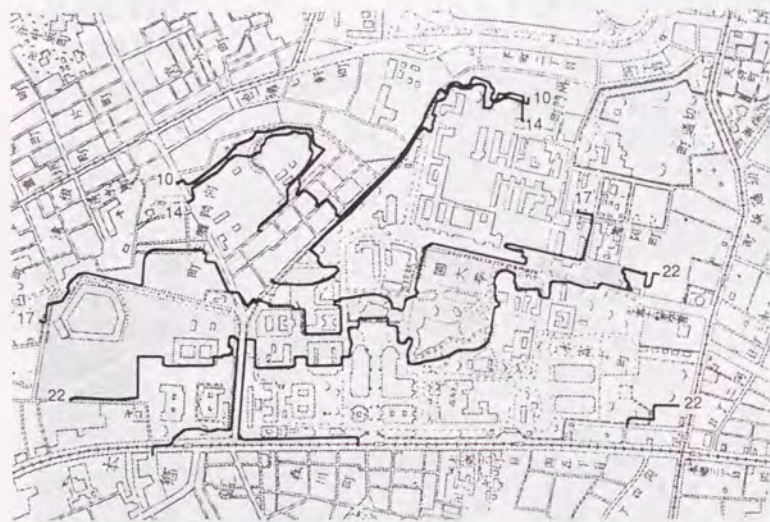
昭和20年／周辺環境

1/10,000










昭和31～33年／周辺環境

1/10,000



昭和20年／地形

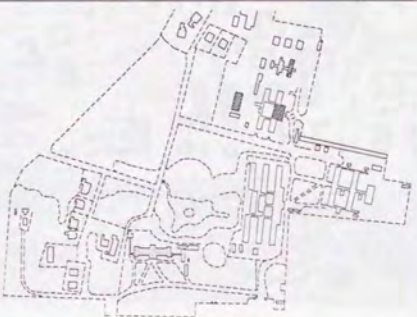
1/10,000

-  擬洋風
-  古典系
-  古典系・改
-  和風
-  内田ゴシック
-  ゴシック系
-  分離派 他



明治16年

1/10,000



明治17年

1/10,000



明治21年

1/10,000



明治27年

1/10,000



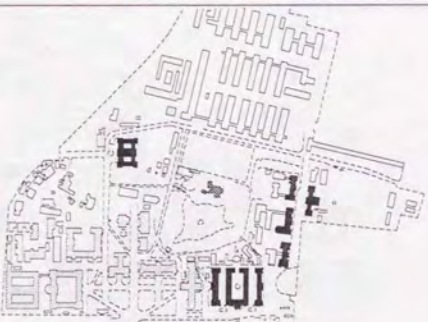
明治28年

1/10,000



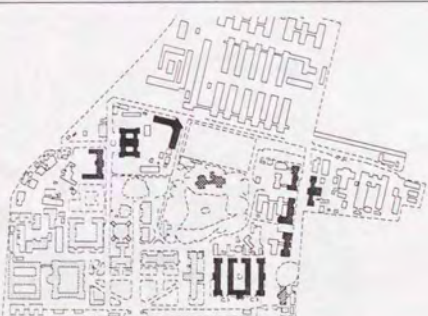
明治36年

1/10,000



明治40年

1/10,000



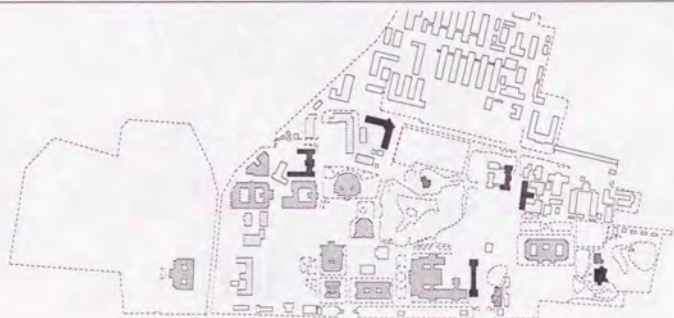
大正12年前期

1/10,000



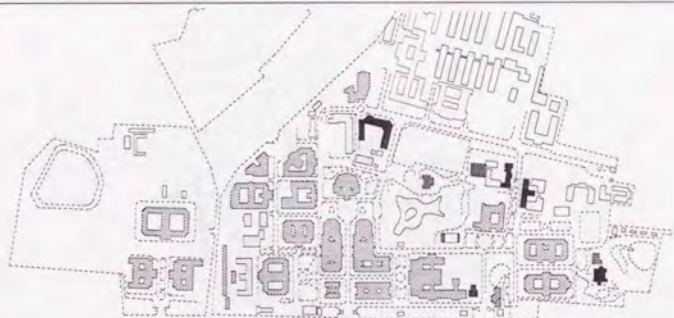
大正12年後期

1/10,000



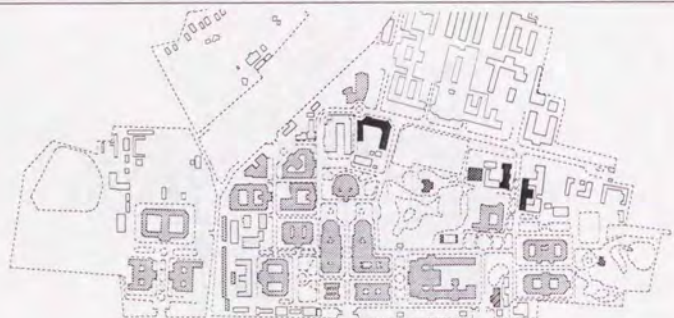
昭和7年

1/10,000



昭和16年

1/10,000



昭和33年

1/10,000

- 中庭型
- 光庭型
- コ コの字型
- 一 一文字型
- 逆コ 逆コの字型
- C C字型
- L L字型
- 塔
- +



明治16年

1/10,000



明治17年

1/10,000



明治21年

1/10,000



明治27年

1/10,000



明治28年

1/10,000



明治36年

1/10,000



明治40年

1/10,000



大正12年前期

1/10,000



大正12年後期

1/10,000



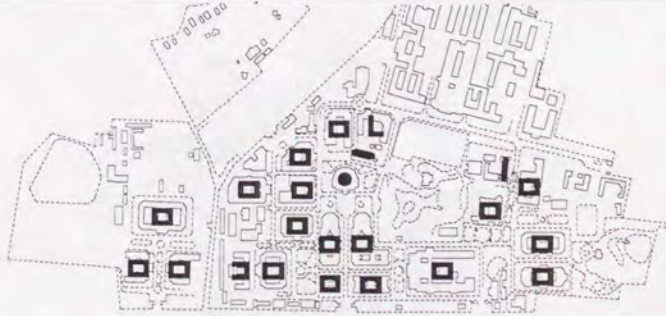
昭和7年

1/10,000



昭和16年

1/10,000



昭和33年

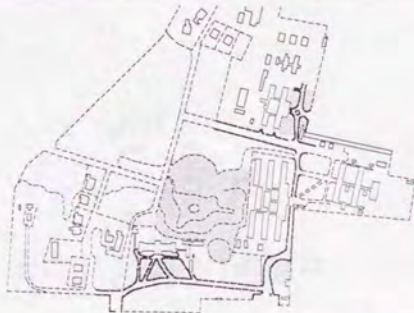
1/10,000

- 舗装、砂利敷きの道、締め固められた道
- 植栽領域
- 並木、樹列



明治16年

1/1,000



明治17年

1/10,000



明治21年

1/10,000



明治27年

1/10,000



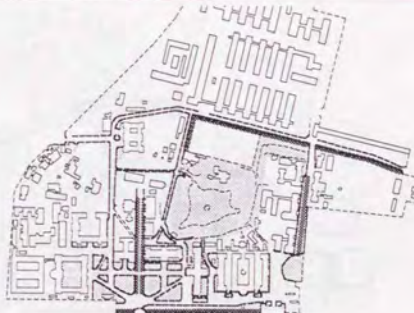
明治28年

1/10,000



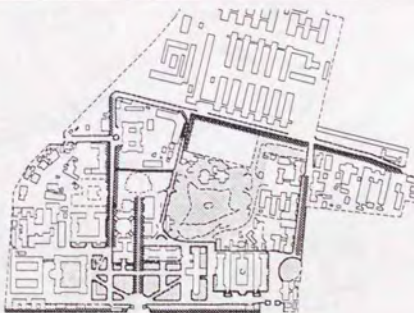
明治36年

1/10,000



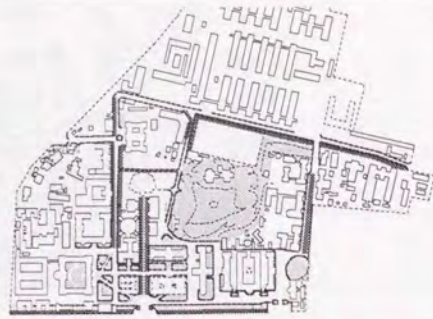
明治40年

1/10,000



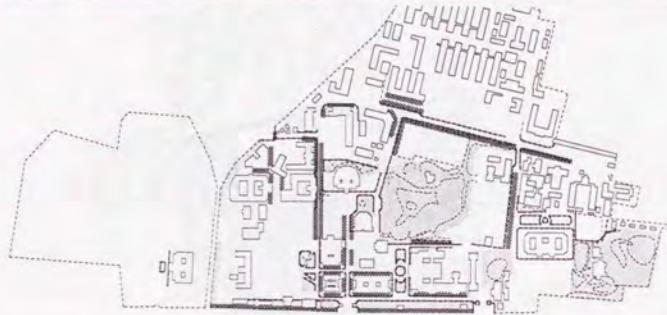
大正12年前期

1/10,000



大正12年後期

1/10,000



昭和7年

1/10,000



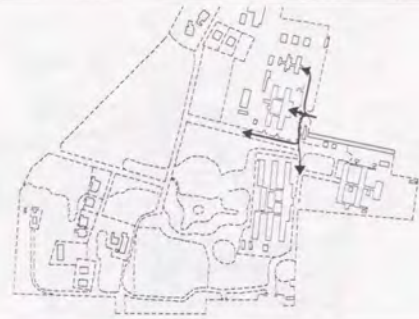
昭和16年

1/10,000



昭和33年

1/10,000



明治16年

1/10,000



明治17年

1/10,000



明治21年

1/10,000



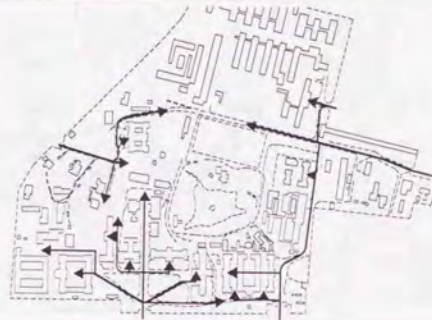
明治27年

1/10,000



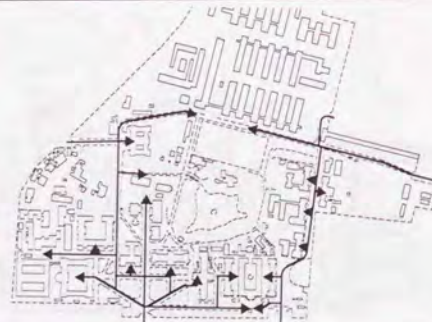
明治28年

1/10,000



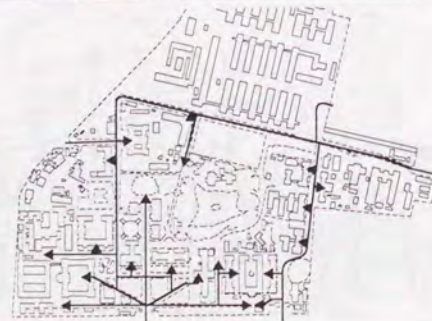
明治36年

1/10,000



明治40年

1/10,000



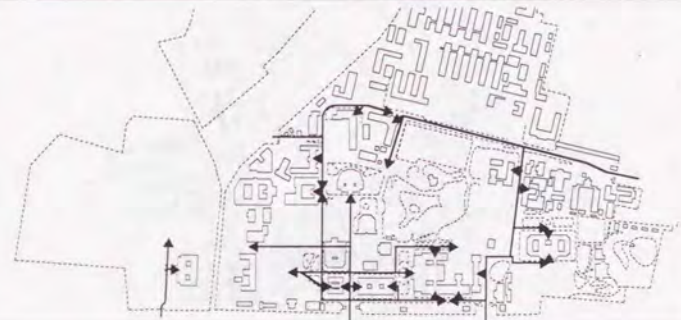
大正12年前期

1/10,000



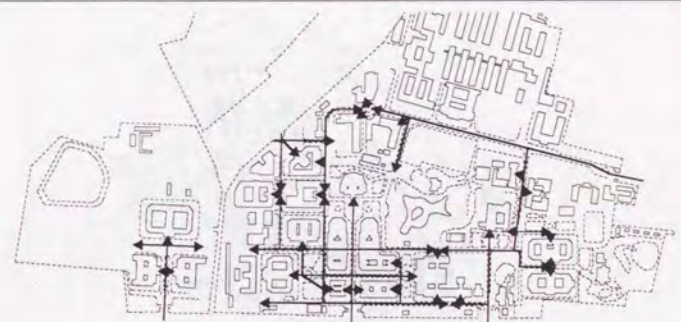
大正12年後期

1/10,000



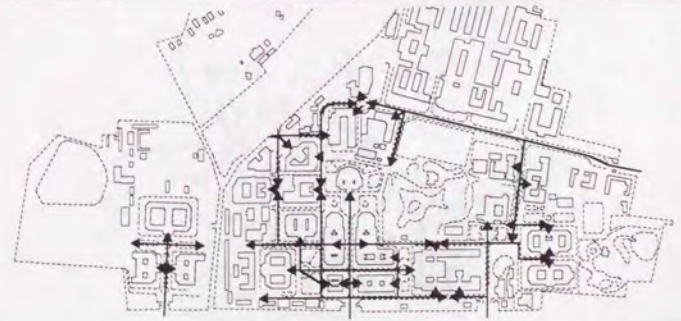
昭和7年

1/10,000



昭和16年

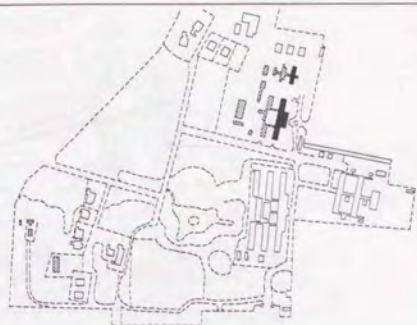
1/10,000



昭和33年

1/10,000

■ 本館
■ 附属屋など



明治16年

1/10,000



明治17年

1/10,000



明治21年

1/10,000



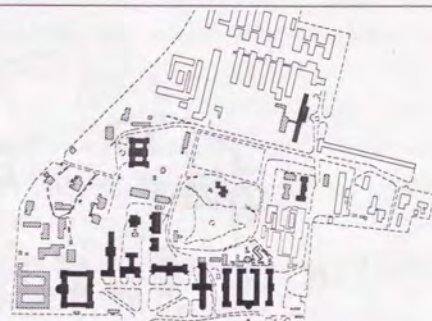
明治27年

1/10,000



明治28年

1/10,000



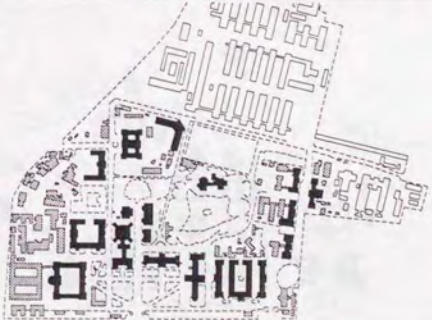
明治36年

1/10,000



明治40年

1/10,000



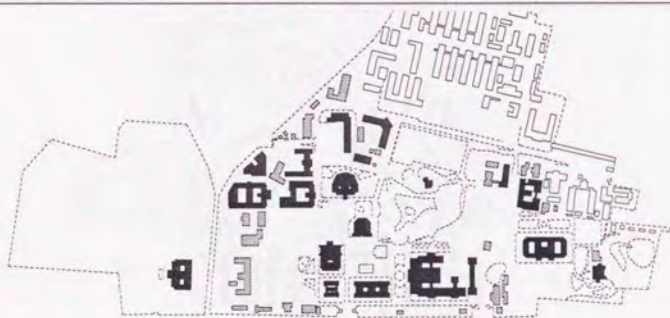
大正12年前期

1/10,000



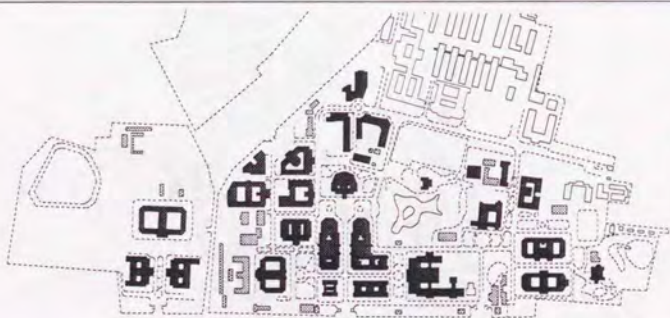
大正12年後期

1/10,000



昭和7年

1/10,000



昭和16年

1/10,000



昭和33年

1/10,000

3-8 内田期以降；高度成長期；昭和30年代から昭和50年代まで 約20年間

明治期の建物が残る区域（工学部など）やその他の空地、緑地に一門字型の平面形の中高層建築が建てられてゆく。内田退官後、工学部でも内田の中庭を囲む街区型の建築に対し、単純な一字型の建築を好む向きがあり、工学部8号館のデザインにも影響を与えたという。³⁸

—工学部5、7、8等の建物、経済学部、医学部3号、薬学部、農学部、教育学部、医学図書館など。工11号（S43）もあるが、敷地の状況からすると作家期のもと考えられる。

— 作家期；昭和50年代から平成2年頃まで。約13年間

学内が建て込み、地下や屋上、道路上や植栽内などに多様な建て方を模索した。その多くが建築家によるものであった。

—工6号増築、法文増築（S51～S56）、中央食堂（S51）、総合資料館（S58）、法4号（S62）、文3号（S62）

一概要

この章では、本郷キャンパスの空間的な骨格が形成された大学創設から昭和30年代までに至る3期についてオープンスペースの分析を行う。分析はまず編成形式を抽出し、それを宮殿形式と比較。宮殿形式がどのように適用されたか、その適用の形態を検証する。三つの時期とは、1) 草創期 (M10-M27)、2) 明治期 (M28-T12前半)、3) 内田期 (T12後半-S30年代)である。

分析の結果、草創期には大きく日本的な変形を受けるものの、基本的に宮殿形式の原型的な適用を示した。明治期においては、前半は草創期から引き続き、宮殿形式の原型的な適用で始まる。ついで後半には「小宮殿」を機械的に繰り返す反復的な適用形態を示し、前庭の広場と街路、それに街区を形成する。建築型もこうした適用のもとに単純化される。明治期の最終段階では、「T字形式」という、空間の開放的な編成単位を暗示し、次の内田期に全面的に展開する体系的な適用の基礎を示した。内田期はその「T字形式」を基本に、序列的な軸の体系に基づく編成形式によって、今日みる規模にまで拡大したキャンパス全域を統合する。宮殿形式の適用としては、部分と全体をすべて宮殿形式で編成する体系的な適用形態に達した。こうした分析結果より、本郷キャンパスの形成過程は、草創期から内田期に至るまで、仮説的に設定した宮殿形式やその変形形態によって規定されていることが理解できた。さらに、宮殿形式の適用形態と大学の組織の変化を比較し、宮殿形式が、その時々大学の組織形態に対応し変化してきたことが明らかとなる。

本論で分析の対象とする期間は、前章で述べた五つの時期のうち草創期から内田期迄の三つの時期とする。具体的には明治10年(1877)の東京大学の創設時から昭和30年代(1955頃)までのおよそ80年の期間である。

この期に絞る理由は二つある。第一に、この時期はキャンパスの形成という点で今日まで続く空間的な骨格が形成された最も重要な時期である。比較的歴史の浅い日本の大学の中にあつて、本郷キャンパスは今日まで長い期間にわたる空間の形成の跡を同一の場に刻む数少ない例である。それは直接的には戦前の計画に基づいているが、背景となった前史を含めると1世紀を越えた形成の結果である。形成過程は混沌としているが、震災という物理的な断絶が起こったため、空間編成という点では逆に実際の時間以上の持続的な変容の跡を示している。対象とした時期はそうした大学空間の形成過程の核心に当たる。

第二に、この時期が含まれる19世紀後半から20世紀前半は、世界的に見て大学が理念、組織、制度、空間などにおいて近代大学としての枠組みを整えていった時期である。東大もその例外ではなく、急速に近代大学としての組織、制度を整えていった。文化的、歴史的背景の大きく異なる欧米の類似例と東大を比較することにより³⁹、空間編成の形式における東大の固有性と、近代大学の一般的な傾向を理解することができる。

4-2 分析・草創期の変容 (M10-M27)

一概要

この時期に、大学の最初期の施設群が整備された。正門地区では構外に向かってコの字型に配置された建物群によって、広大な空地的オープンスペースの中に孤立する大きな前庭的なオープンスペースが形成される。これは、配置形式とオープンスペースの特性からすると宮殿形式が拡大、断片化された「大形式」であり、それが形成された過程は宮殿形式が基本的特徴を維持するように適用された。即ち、宮殿形式の原型的な適用形態と言える。全般に日本的な「屋敷型宮殿」の影響を受け、構内は庭園的、空地的な特性のオープンスペースが連続する。他と離れ建てられた理学部、擬洋風で建てられた医学部地区は宮殿形式の適用は見られない。

4-2-1 変容の4段階

図3-36、37、42、46、49、52、55、58

(1) M16 一大名屋敷跡に展開するキャンパスの原初形、自然地形、既存施設などがオープンスペースのまとまりを規定

本郷キャンパスの原初の形。塀などに囲まれた広大な空地的オープンスペースの中に医学部と医院が一定の領域をつくる。ほかには理学部の観象台などの小規模の建屋が独立に散開する。建設可能な空地は限られている。

周囲は柵ないし塀で囲われ、外部と明確に区別された一続きの広大なオープンスペースをなす。内部は第一に自然地形、庭園などの植栽によって本郷通りよりの比較的高い西側平坦地部分と医学部などが展開する低い平坦地部分(現病院部分)に二分される。それらの領域の間は庭園、及び傾斜地になっている。音楽取調所、教師館の施設群、理学部観象台などが各々独立して空地の中に展開するが、それらはオープンスペースの明確なまとまりはなさず、曖昧にその周囲に領域をつくる。

まとまった空地としては三四郎池西側部分と現理学部が展開しているあたりが際立っている。病院地区、医学部地区は医学部本館がいわゆる鉄門に面し玄関先の明確な寄りつきのためのオープンスペースのまとまりを作り、そこから本館周辺や背後に展開するほかの教室や医院などへ至る道がのびる。

(2) M17-法文校舎が空地の中に孤立する領域を形成。前庭様オープンスペースと裏の領域が形成される。

法文校舎が新築されるが、以前からあった周囲の柵も取れず、その内側に一つのまとまりある庭園的なオープンスペースが形成される。建物周辺には付属屋が置かれ、裏を形成。アクセスは旧来の北よりの門と赤門の間を結ぶ園路様の道から分岐し、母屋の前には前庭様のオープンスペースが形成される。ほかは変わらず。

(3) M24-工科、理科大が竣工し、相互に独立した領域を形成。門と各領域は関係弱い。

工科大学と理科大学の建物の前面表側、すなわち門側はほかと比較しやや外構が整備された感があり、オープンスペースの緩いまとまりが形成される。しかし建築群が一体となり作るオープンスペースのまとまりは見られず、地形、道のとりまわしなどから見ても、医、法文、工、理が各々独立した四つの領域を作る。

(4) M27-大前庭を中心とする正門地区における両義的—体的かつ集合的な一領域の形成、明確な表と裏のオープンスペース

法、工、理、文の四分科大学と図書館が正門地区にそろう。それまで各建物ごとに独立していた領域、前庭様のオープンスペース(以後大前庭という)が、校舎群に囲まれた一体感の強いオープンスペースを中心にまとまり、一つの領域に統合される。結果としてオープンスペースは構内全体のための共通の前庭という性格を強める。正門はほぼ法文校舎の真正面に移動し、法文との関係を強める一方、門を起点に道は分岐するなど領域と門の関係はやや強まる。

同時に各建物は相異なる建築型とスタイルを持ち、アクセスも建物ごとに園路様の道が引かれ、また植栽部分が塀際まで続くなど、広大な空地状のオープンスペースの上に展開する個々に独立した領域と前庭の集合にも見える。母屋は図書館以外、正面性ある軸対称形であり、強いまとまりをなす。アクセスがつく面として他から区別された「表」の領域が形成される境界は曖昧である。各建物の周辺や背後には、付属屋が配され、裏的な領域が形成される。全体として表の前庭的なオープンスペースと裏の領域を含みながら基本的に庭園的特性で一貫した正門地区の領域が形成される。

理科大は地形的に区切られた領域の中に孤立。弥生門からの道路が運動場横の道路につながり、領域はより明確になる。医科大の領域は特に変わらない。

4-2-2 各レベルの変容の特徴と空間編成の形式

A 要素レベル

図4-8

一変容の特徴

地形、道などによって緩く境界づけられたオープンスペースのまとまりの中に、強い中心性のある完結的な形態を持つ建築が配される。その周囲には、一定の広がりを持つ庭園的・空地的な領域が形成される。

その庭園的な基本的特性を損なわない範囲で、建物前面に「表」の領域、前庭様のオープンスペースが形成される一方、建物背後や周囲には小規模な付属屋が展開する「裏」的な特性の領域が形成されてゆく。

各領域は門を通る道を介して外とつながるが、距離があり、屈曲しており構外との連続性は弱い。たとえ塀が視覚的に透過性のあるものでも、その内側の際まで植樹されており、各領域は構外の都市空間と関係が薄い。塀の内側の広大なオープンスペースの中に浮かぶ領域といえる。

多様な建築型は領域相互の独立性を強める。囲われた中庭を持つ工科大学、光庭状の中庭のある理科（化学）、囲み形式の前庭様オープンスペースを持つ変形H型の平面形をした理科（博物）など。スタイルも最終的に、正門地区のゴシック系、医科地区の擬洋風系、理科の古典系という形にそれぞれまとまり、相互に独立した印象を深める。

医学部地区では、門に正対し一軸対称形の建物を配置し、それを中心として周囲に一定の領域が形成される。門と玄関のある建物正面の間に「表」の前庭的なオープンスペースが形成される一方、母屋の背後や周辺には付属屋が展開する裏の領域が形成される。前庭は建物正面や壁際、塀の際まで植栽がなされ、建物と門を結ぶ幾何学的軸性も弱められるなど、庭園的な領域の一部であることが示される。構内と構外は塀が鉄柵であり視覚的にはつながるものの、連絡は門に限定される。塀際の植栽によって、領域全体を都市空間から幾分切り離そうとする傾向が見られる。

一空間の編成形式

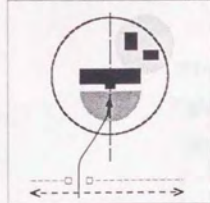
図4-1

正門地区、理学部地区；境界の曖昧な空地的ないしは庭園的特性の一体的領域、正面と裏の萌芽、弱い軸性、構外とは空間的に切り離されている。完結的で一貫した建築形態、前後の方向性

図4-2

医学部地区；境界の曖昧な庭園的特性の一体的領域、正面と裏の萌芽、弱い軸性、構外との弱い関係、完結的で一貫した建築形態、前後の方向性

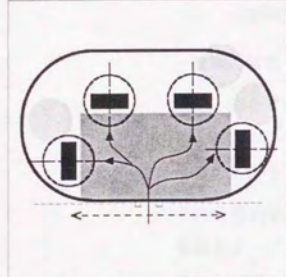
正門地区、理・地区 4-1



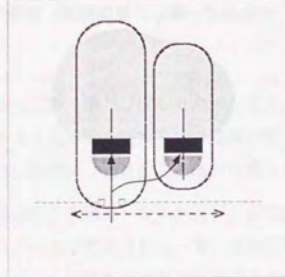
医・地区 4-2



正門地区 4-3

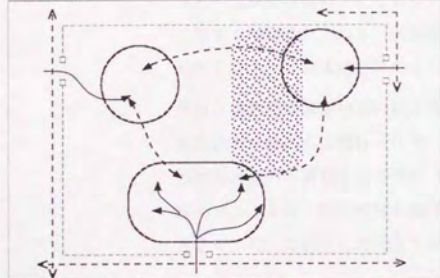


医・地区 4-4



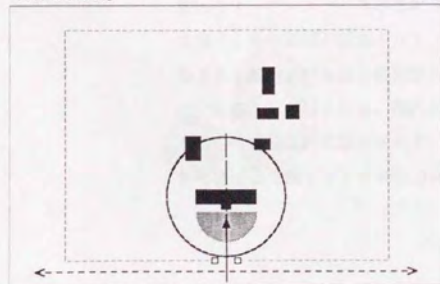
全体レベル

4-5



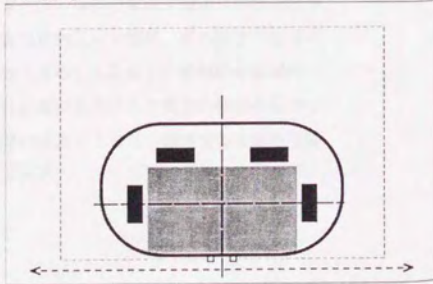
「屋敷型宮殿」

4-6



「大形式」

4-7



B 中間レベル

一変容の特徴

図4-9

医学部、病院地区と正門地区の二箇所では建築群が対照的な空間形態の領域を形成してゆく。正門地区では、オープンスペースを中心とした領域が形成され、一方医学部地区では、建物を中心とし、その周辺にオープンスペースの曖昧な領域が形成される形式である。

正門地区では、本郷通りに沿った台地に広がる大きな空地的な領域の中に、順次、法文、工、理（博物）、図書館などの建築群が置かれ、それらに三方を囲まれた矩形平面のオープンスペースのまとまりが形成される。このオープンスペースは建築群全体の大きな前庭様のまとまりとなり（以下、大前庭という。）、これを中心として建築群とその周辺の領域を含めた一つの大きな領域が形成されてゆく。

この形成の過程はあらかじめ全体配置の計画が存在し、それに従い配置が決められたことを強く暗示するが⁴⁰、同時に建物ごとに異なる建築型や別々にアクセス路が引かれる様子などからわかるように、個々の領域、前庭が相互に独立しつつ統合されながら一つの大きな領域を形成したものである。

大前庭は、植栽が施され、屈曲した園路的なアクセスが続き、一貫した軸性が欠如するなど、明確な配置形式の割に一体感の弱いオープンスペースである。それはより大きな空地的、庭園的なオープンスペースの上に形成された「表」のオープンスペースのまとまりと考えられる。一方、建築群の背後や周辺では付属屋等の施設が集積され始める。領域全体として中心に表の前庭的オープンスペースが明確なまとまりをつくり、周辺に裏的な領域が集積されてゆく。

この領域は構外の都市空間とは道を介してのみ連続する。視覚的にも門を通し内部がうかがいしれる程度であり、要素レベルの領域と同じく構外の都市空間との連続性は弱い。

医学部地区では、自然地形、道路、塀などで区切られた一体の広大な田園的領域の中で、鉄門の方向に正面を向けた建物を中心に、その周囲に形成された領域が反復される。いずれも建物玄関前に軽く寄りつきの整備が施され、前庭様のオープンスペースをなす。母屋の背後などに裏的な領域が形成されてゆくのも同様である。以上の変容を通じ、領域全体の空地的、庭園的特性は変わらない。

一空間の編成形式

正門地区；大前庭を囲む建築群の囲繞性、庭園的特性の一体的領域、建物毎に形成される要素レベルの編成領域と建築群の形成する中間レベルの編成領域が複合した形態。正面と裏の形成、軸性の欠如した集合形態、スタイルの緩い一貫性、門に限定された都市との連続、前後の方向性

図4-3

ちなみに大前庭のスケールは210m*95mである。比較としてコンドルのものを挙げるとおよそ135*83mであり、奥行きはほぼ同じで、幅のみ1.5倍ほどに拡大されている。

医学部地区；要素レベルでみた建物を中心として編成されたオープンスペースのまとまりを反復。

図4-4

C 全体レベル

一変容の特徴

図4-10¹³

緩く囲まれた広大な空地的領域の辺縁部に、相互関係の希薄な自律的領域が漸次散開してゆく。各領域は直接構外の都市空間と連続するのではなく、あくまで空地的領域の中に浮かぶもの。トポジカルなものも含め構外に正面を向ける。結果として、構内中央部、庭園部分や斜面部分に空地や裏の領域が多く残される。全体スケールで各領域を関係付け、組織してゆく明確な傾向は見られない。

最終的に、正門地区に医をのぞく他の学部の手が集結し、全体の中心、正面となるような際だった領域と囲まれたオープンスペースが形成される。

一空間の編成形式

図4-5

構外の街路に正面を向けた自立的諸領域が空地的なオープンスペースが広がる構内辺縁部に並ぶ。結果的に中央は空地、庭園、裏的なオープンスペースとなる。

4-2-3 宮殿形式の検証

A 要素レベル

一屋敷跡に置かれた宮殿風洋館、宮殿形式の適用見られず。

各レベルの変容の特徴から導いた編成形式と宮殿形式を比較し、両者の異同を考えると、このレベルの変容は宮殿形式によって規定されたものとは見なせない。共通点としては領域の一体性と一貫した建築形態が指摘される一方、相違点としては、一体的なオープンスペースであっても空地的、庭園的な単一の特性を持つこと、表裏という形で二領域性も暗示されるが曖昧であり、また軸による統合もされない。前庭様のオープンスペースも都市空間を引き入れておらず、それを囲む形式も欠いていることなど、多くの基本的な違いが見られる。

こうした空間の編成形式は、大名屋敷跡に宮殿風洋館を配置し、官庁、学校などに当てた当時の例と基本的に同一と考えられる。本郷キャンパスも加賀藩上屋敷跡を主とした大名屋敷跡に展開した。屋敷の建屋自体は残っていなかったが、塀で囲まれた広大なオープンスペースの中に大学の施設が配置された。そのオープンスペースは、外部とは門を通してしか連絡しない、外部から切り離された領域である。それは大名屋敷の庭園的な特性、あるいは建屋が消失した跡の空地的な特性の広大なオープンスペースであった。こうした編成形式を屋敷跡の基本的特徴を残しつつ宮殿風洋館を配置するという意味で、「屋敷型宮殿」と仮に呼ぶ。

図4-6

「屋敷型宮殿」に共通するオープンスペースの特徴は単一の一体性、空地的、庭園的特性、全体の閉鎖性の三点にまとめられる。上で見たこのレベルの異同はこの屋敷型の特徴からすべて理解できる。「宮殿」とは言いながら本論でいう宮殿形式とは基本的に異なるものである。

B 中間レベル

一正門地区における「大形式」の原型的な適用

編成形式の異同から見て、正門地区の領域の形成は、宮殿形式の「大形式」化の過程であると同時に、その過程に空地的、庭園的な「屋敷型宮殿」の性格も刻む両義的なものであった。

即ち、正門地区の編成形式の第一の特徴は、一つのオープンスペースを複数の建築群で囲み、明確なオープンスペースのまとまりを中心とする編成をみせることである。これは、単一建物からなる原型の宮殿形式を拡大した上で断片化することであり、先に2章の宮殿形式で見た「大形式」の配置形式に他ならない。

図4-7

それと同時に、草創期の時点では未だ「大形式」の適用は徹底しない。明確な二領域性が最後まで見られないからである。編成領域全体に共通する空地的、庭園的な基本的特性の上に重ねられた表裏という輪郭が曖昧な領域は、都市・表／庭園・裏といった相対立する二領域性が統合され一体的な編成領域を形成する宮殿形式と異なっていた。

以上まとめると、正門地区は「大形式」の基本的特徴の内、相異なる特性のオープンスペースを統合するという特徴は見られないものの、オープンスペースの基本分節を担う最重要な配置形式において基本的特徴を維持しつつ変容を遂げたと言える。前者が当時の屋敷的なオープンスペースの特徴に由来する変形と考えると、この草創期の変容は、宮殿形式の原型（ただし「大形式」と言う変形形態ではあるが、原型の一種）の特徴を維持すると言う意味で、宮殿形式の原型的な適用形態を示したと言える。

この「大形式」の形成は、囲まれたオープンスペースを形成したという点で「屋敷型宮殿」による本郷キャンパスの形成を宮殿形式によるそれに近づけた。「屋敷型宮殿」では母屋が完結的形態を与えられ、塀との間の空間が「地」的な残余のオープンスペースに見える。一方、三方を囲まれた宮殿形式の前庭は空地的、庭園的オープンスペースの連続的な拡張性に対し、「図」的まとまりを作るという点で、都市的空間に類似する。「大形式」による前庭的オープンスペースは形態は後者即ち、宮殿形式に近いが、特性は前者即ち「屋敷型宮殿」であった。

この他の異同としては表裏という曖昧な二領域性、前庭の弱い都市性と建築の一貫性の弱い形態などが相違点としてはあげられる。二領域性と弱い都市性については空地的、庭園的な特性で統一される屋敷跡の特徴に由来する。建築形態の弱い一貫性は、独立的な領域の集合形態からくる。スタイルだけに限ればゴシック形で一貫していた。

共通点は前庭の囲繞性と都市空間への近さである。一つ一つの建物がその周辺につくる領域は門からの距離があり、都市空間から切り離されていたが、

「大形式」の凹型の配置は奥行きが浅く（およそ95m）、幅が広い（およそ210m）ため、たとえ前庭の特徴が空地的、庭園的であっても、都市空間へ構え、都市空間を引き込むものであった。こうした特徴は宮殿形式の基本的な特徴の一つである。

一医学部地区では宮殿形式の適用は見られない。

医学部地区は非都市的な前庭、統合性の欠如など、独立的な「屋敷型宮殿」が反復され、宮殿形式の適用は見られない。オープンスペースは庭園的領域の特性以外、一体性はない。

C 全体レベル

宮殿形式の適用は見られない。

オープンスペースのまとまりは明確に関係づけられず、構内全体の一体性は弱い。特性庭園的、空地的な区域が多く、塀で囲まれた広大な「屋敷」の中に、要素レベルの「屋敷型宮殿」を繰り返しながら成長した結果を示す。いずれの点でも宮殿形式が適用されたものとはいえない。

ただ、後にみるように、宮殿形式は基本的に都市的空間に面しそれと連続する都市的前庭をもつことから、大学の大規模化、専門分野の独立化が進むにつれ、複数の宮殿形式の建物が街路に沿って並べてゆく変容のパターンを示す。宮殿形式の典型的な大規模化である。本郷キャンパスのこの期に見られた全体配置、すなわち三つの独立した領域を構外の街路に向け構内辺縁部に配置してゆく形式は、この変容のパターンに類似する。しかし、「屋敷型宮殿」の編成が大規模してゆくパターンとも考えられ、曖昧な面がある。

4-2-4 まとめ

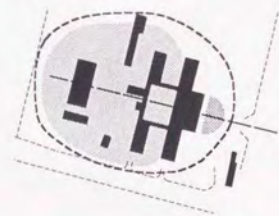
一「屋敷型宮殿」が散開する全体と部分における「大形式」の原型的な適用

この期の変容は基本的に屋敷の空地的、庭園的なオープンスペースの中で展開した。その過程は宮殿形式とはかけ離れた「屋敷型宮殿」を基本的要素とするものであったが、大学の中核的な施設が展開した正門地区では宮殿形式の変形形態の一つである「大形式」の形成が進んだ。これは「屋敷型」という日本的なオープンスペースの編成形式の変形を受けつつ、「大形式」という宮殿形式の原型的な適用が行われたものであった。

結果として形成された領域は、個々の建物を中心として編成された自律的な領域からなるまとまりの弱いものと考えられる。

全体レベルでは、構内の広大な空地的なオープンスペースの中に、正門地区の領域を含め、大小の自律的な編成領域が散開する。各々は独自に門を備え、大学周辺の街路に沿って街路に向かって「屋敷型宮殿」の領域が並ぶ。後述するように、宮殿形式が反復される適用形態に類似しているが、曖昧である。

大学組織との関係で言うと、この時期の東大は未だ各種の専門学校をまとめ、その名称を大学に変えただけという面を残していた。大学としての一体性が希薄であったと言える。一つのまとまりあるオープンスペースを形成する「大形式」の萌芽をみせながら、それを構成する各建物、あるいはその集合形としての「大形式」そのものが、より大きな空地的、庭園的オープンスペースの中に孤立する。曖昧な形式の空間編成は、いまだ確立しているとは言えなかった草創期の大学組織がその背景の一つになっていたと考えられる。

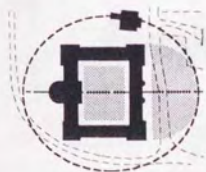


明治16年

1/4,000

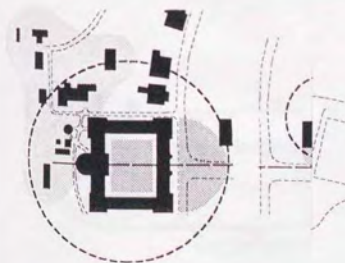
明治17年

1/4,000



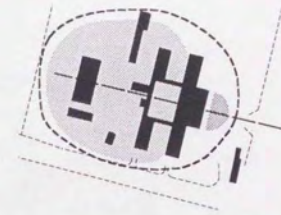
明治21年

1/4,000



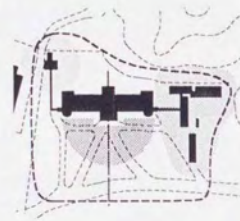
明治27年

1/4,000



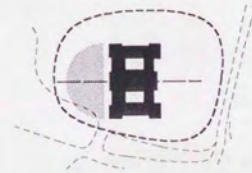
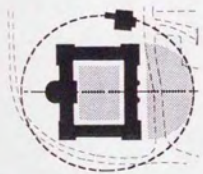
明治16年

1/4,000



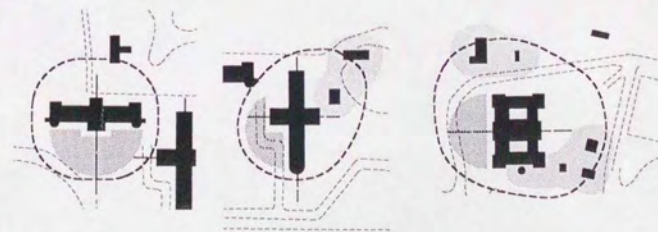
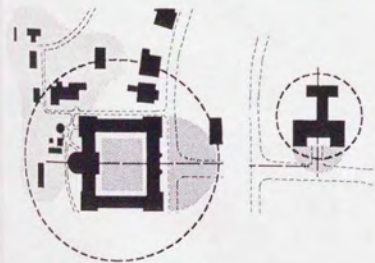
明治17年

1/4,000



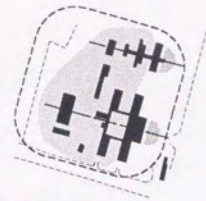
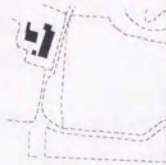
明治21年

1/4,000



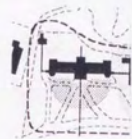
明治27年

1/4,000



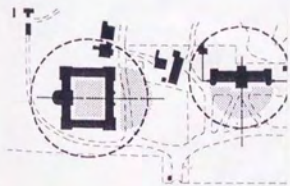
明治16年

1/6,000



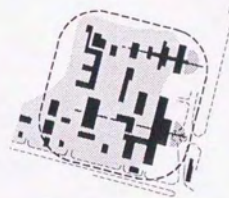
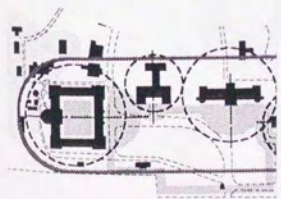
明治17年

1/6,000



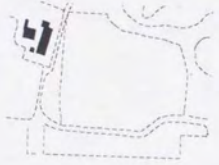
明治21年

1/6,000



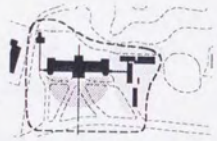
明治27年

1/6,000



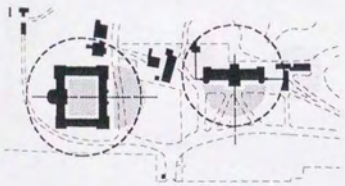
明治16年

1/6,000



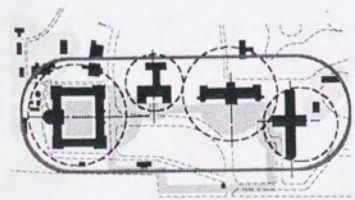
明治17年

1/6,000



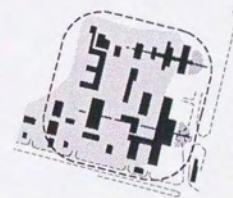
明治21年

1/6,000







明治27年

1/6,000



オープンスペースの基本単位

-  表のオープンスペース
-  裏のオープンスペース
-  緑のオープンスペース
-  軸



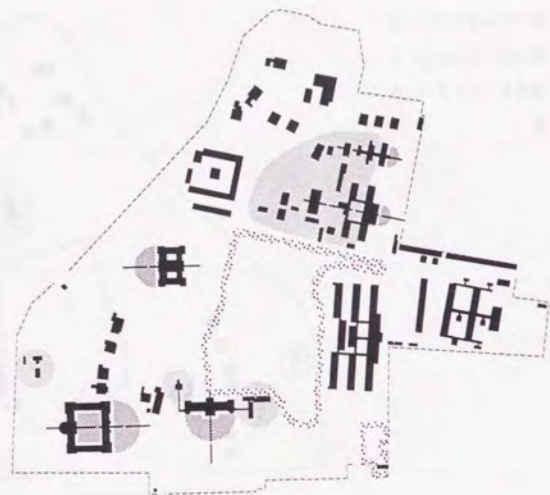
明治16年

1/7,500



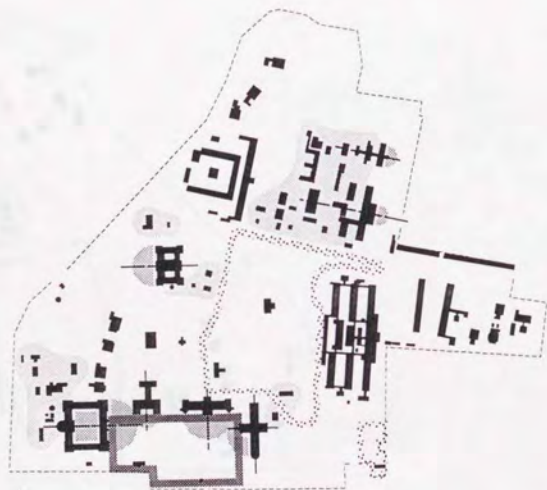
明治17年

1/7,500



明治21年

1/7,500

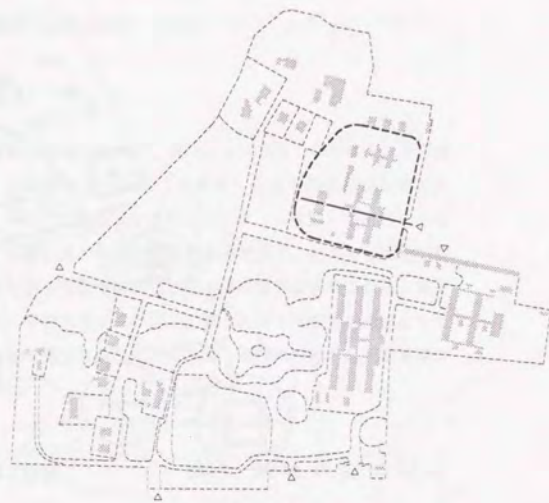


明治27年

1/7,500

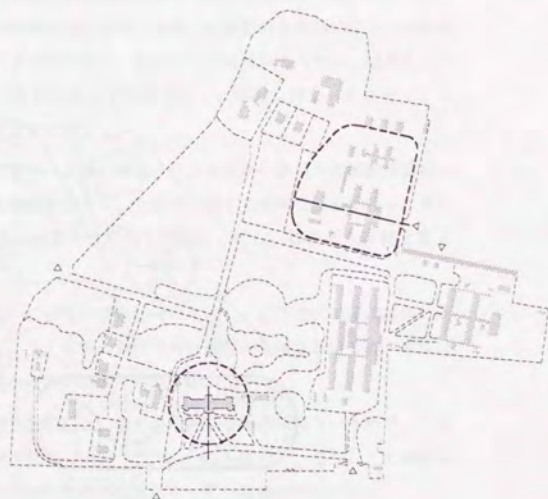
編成領域

- 表のオープンスペースを
囲む編成領域
- 裏のオープンスペースを
囲む編成領域
- 上記以外の編成領域
- 軸



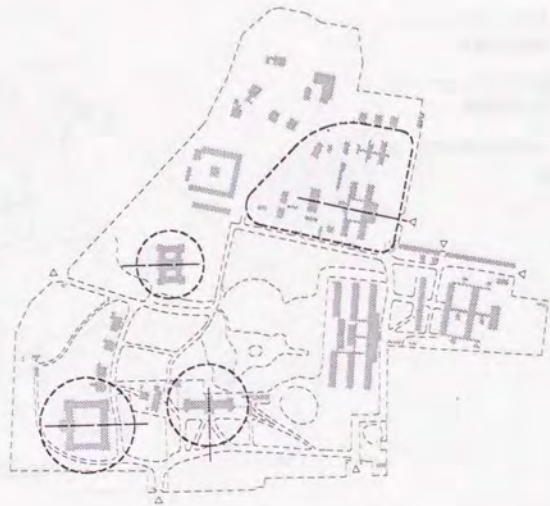
明治16年

1/7,500



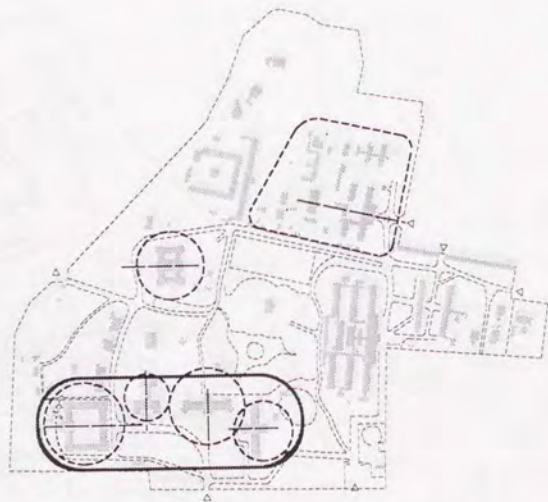
明治17年

1/7,500



明治21年

1/7,500



明治27年

1/7,500

4-3 分析・明治期の変容 (M28-T12)

一概要

明治期には、施設規模が急激に拡大し、構内はほぼ開発し尽される。その前半（～M40）には、草創期に見られた「大形式」の適用の過程が継続される。後半（M40～）には、宮殿形式が簡略化された「小宮殿」が街路にそって並べられてゆく。宮殿形式の反復的な適用形態である。結果として前庭の広場と街路、街区など都市空間を構成する基本的な要素が形成される。震災直前、明治期末には、中間スケールの編成形式であるT字形式の形成にまで行きつく。これは次節で見る宮殿形式の体系的な適用のための必要な要素であった。

4-3-1 変容の4段階

図3-38,39,43,47,50,53,56,59

(1) M28-正門地区大前庭の都市的な整備、正門位置の確定、街路の形成、工と法文の背後で付属屋が展開し、表裏のオープンスペースの基本単位が明瞭に分離する。

広大な田園的な構内に自立的領域が散開する状態は基本的に変わらないが、正門地区の大前庭は構外の都市空間に連続する直線的な街路による一体的な整備がなされ、それまでの空地的、庭園的な特性は弱められる。結果として他の領域、空地との特性の違いが明確になり、建物に囲まれたオープンスペースとしてのまとまりが強まる。

正門は大前庭のほぼ中央の位置に確定され、そこから伸びる道路網は道幅一定で境界も明確な直線路からなり、大前庭に面する建物を関係付ける。それまでの空地の間を抜けるような屈曲した園路に対し、都市的な街路と言える。

正門から伸びる道沿いに法文の関連施設が展開し、正門地区の領域は奥に向かってやや拡大する。工・本館の背後でも付属屋が集積されはじめ、本館は大前庭を囲み、背後には裏の領域を展開する。

囲まれた都市的特性の大前庭と、境界の不明確な裏の領域という形で、二つの異なる領域が形態、特性の両面で明確に分離し始める。ただし、大前庭は高木や道沿いの低木を含む植栽の形態からして、庭園の特性が残る。

正門から見て奥に向かうに従い道路は街路から園路に変化してゆく。オープンスペースの形態も奥に進むにつれ、囲まれた形式から境界の不明確な領域となってゆく。囲まれた都市的大前庭を持つ正門地区は構内全体の前庭となり、アクセスの起点となる。

大前庭を囲む各建物の全面には、玉石など区切られた前庭様のオープンスペースがつくれる。改めて建物が庭園的オープンスペースの中に孤立するのではなく、前面の街路に面し並び建つ宮殿形式としてと見え直された。工・本館、理・博物はとくに直接前面街路から進入する囲まれた形式の前(中)庭を持ち、原型的宮殿形式に近い。

(2) M36—街路と裏の領域の成長により、囲まれた形態の代表的な都市的オープンスペースと開放的な形態の裏のオープンスペースの対比が強まる。一文字型、変形逆コの字型など二領域型の建築型の反復、医の移転開始と新しい医・地区の形成

奇矯な形式(工・造船)を用いても大前庭の単純なまとまりの形態が維持される一方、街路の成長と平行し、表裏のオープンスペースの基本単位を明確に分ける二領域型の建築型が形成される。この型は街路や大前庭に面し、比較的単純な正面ファサードを向け、背後に形態や用途のさまざまな付属屋からなる裏の領域を展開する。建物に囲まれ、あるいは挟まれた街路、大前庭などの都市的特性のオープンスペースと工、医の母屋の背後に集積された膨大な裏の領域が強い対比をなす。

医は構内道路に面し母屋を並べ、法文系の建物、図書館などとともに育徳園と裏の領域を背後に抱える大街区を形成し始める。工地区は街路に囲まれておらず、未だ街区の体をなしていない。

(3) M40—大前庭の分解と街路による再統合、街路網の形成と裏の集積、大街区の形成(工、医)、二領域型建築型の反復、逆コの字型建築型

正門から各領域をつなぐ街路が伸び、理地区の部分のをぞきループ状の街路網が形成される。街路に沿った建物が展開、大街区の形成が進む。母屋の建物は各々街区の外郭となるとともに、大前庭を囲む。

大前庭ではさらにいくつかの細かい街路が通り、小前庭工本館前、法文前など)と小街区(徐行アプローチ路のある区画など)に分解される。その小前庭と小街区は、小前庭に向かう街路一軸によって街路に面する建物とともに

統合される。基本的に同型の形式が弥生門—理、法文、工・造船、図書館などで反復される。

二領域型建築型が反復されるが、医の一文字型と工の逆コの字型に見るように、建物が面する街路の数に応じ型が選択される。又、正門を通り、真すぐ奥に伸びる街路沿いに並木が植えられ、明らかなまとまりをつくる。

(4) T12(前期)(この時期までに着工された工2号館の計画を含む。)一大街区の接合された一体性の乏しい構内、正門地区の大前庭と街路網の体系がなすまとまりと、大街区のつくるまとまり。全体の中心的位置を占める正門地区と貫通軸両者は対比的な編成を持つ。ループ状街路形成、逆コの字反復に見る小街区の定着。

構内は正門地区の大前庭と街路網の体系がなすまとまりと、大街区のつくるまとまりで埋められる。前者は前庭群や街路網など明確に囲まれた都市的なオープンスペースのまとまりを中心に持ち、後者は連続するファサードの背後に境界の不明確な裏の領域を持ち、強い対比をなす。

都市的なオープンスペースは正門地区にはほぼ集中し、また街路網も建物に囲まれた(挟まれた)印象が薄い。外郭を建築のファサードで固めた街区と比較するとまとまりが弱い。全体としていくつかの街区が接合されたような一体性の乏しい構内が形成されている。

工地区では三側面を持つ逆コの字型が反復され、広大な街区を小街区に分解しようとする。大前庭の周辺でも街路による街区への細分がすすみ、街路網と単純な矩形的街区によって構内全域を編成しようとする傾向が見られる。全体として前庭の広場、街路網と小街区によって構内を編成しようとする傾向がさらにすすむ。

4-3-2 各レベルの変容の特徴と空間編成の形式

A 要素レベル

一変容の特徴

図4-27

広場、街路など、都市的要素の形成、建物を中心とする領域の縮小、二領域型の建築型の定着

都市的要素—街路、広場、主要交差点などのロータリーが導入される。大前庭は園路の伸びる田園的な形態から、整序された街路網が走り、小街区や独立的な小前庭が形成される。

正門奥の法文系の区域や工、医地区では道に沿って建物のファサードが並び、並木によって軸性が強調される。広場、街路とも、奥行きを浅い建物正面に囲まれ、あるいは挟まれ単純なまとまりを形成してゆく。

建物が大小の街区に限定されるにつれ、曖昧に広がっていた要素レベルの領域は縮小する。正門地区の大前庭を囲い込む建物では大きくとられていた表の前庭様のオープンスペースも、それ以後の計画では次第に奥行きが絞られ、代わって街路などに面し境界の明確な前庭が現れる。一方、母屋の背後には裏の領域が囲い込まれる。草創期に曖昧であった表裏はここで形態、特性ともに明確に分離され、単純なファサードを持つ二領域型の建築型が形成される。

二領域型の建築型としては一文字型、逆コの字型などが挙げられる。街路、前庭的広場など表の都市的オープンスペースを形成し、裏の領域を囲む。最後は四方を表にし、中庭を裏とする光庭、街区型の計画が現れる。大小街区に限定された建築型といえる。

主要な軸が正面に当たる建物は（工・本館、理・本館など）、その前面に独立的にしつらえられた前庭的広場を持ち、背後の裏の領域をその主要軸によって母屋に統合し、一体的な領域をつくる。

一空間の編成形式

一オープンスペースの基本単位；

図4-14,15

前庭的広場；建物に囲われ、明確に境界づけられた前庭的広場、半都市的な特性、軸の貫通、一貫性ある周囲の建物形態

建物正面や門辺などのオープンスペースで主要な軸の交点を差別化

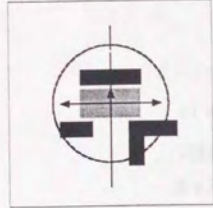
一建物を中心とする領域；

図4-16~18

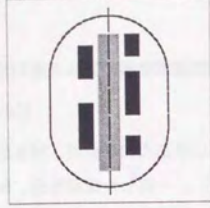
前庭的広場や街路などに面し、奥行きを浅い半都市的な前庭、対比的に深い裏庭（典型として、一文字型、逆コの字型）、一貫した建築形態、表裏を貫通する軸、全体の一体性、統合性は明確

主要軸の焦点となる建物（工・本館、理・本館）の領域は、前面の独立的な前庭的広場も統合。他は上記の建物と共通

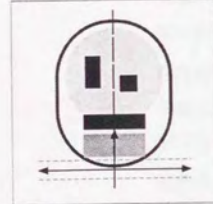
オープンスペースを囲む領域
広場 4-14



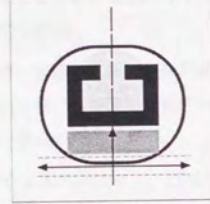
街路 4-15



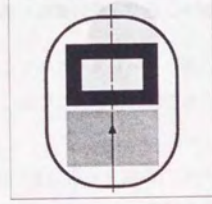
建物を中心とする領域 4-16



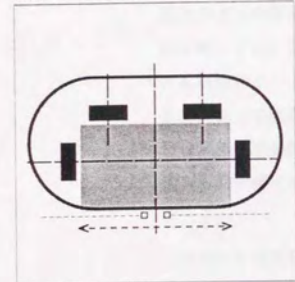
4-17



宮殿形式の原型的な編成 4-18

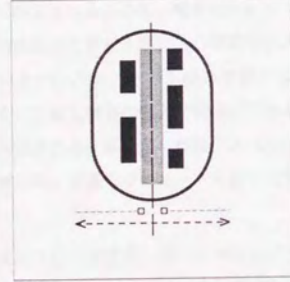


表のオープンスペースを囲む領域 4-19



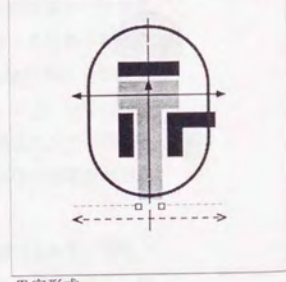
大前庭・大形式

4-20



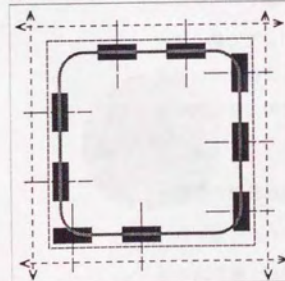
街路

4-21



T字形

裏のオープンスペースを囲む領域 4-22



大街区

B 中間レベル

一変容の特徴

図4-28

一全般の特徴；表の都市的オープンスペースを囲む編成領域と裏を内包する街区の形成

中間レベルのまとまり（正門地区、工、理、医各地区）としては二種類の領域が形成された。表の都市的オープンスペースを囲む編成領域のまとまりと裏のオープンスペースを囲む街区である。前者には草創期以来の正門地区にみる広場を囲むまとまりと工、理、医の施設が面する街路のまとまり、後者には工、理、医の各地区の街路のまとまりがある。

この時期の前半（～M40）に、正門地区では大前庭の一体的整備と都市化が行われ、さらに前庭的広場と街路に領域は分解する。後半（M40～）には大前庭が小さな前庭的広場と街路に分解し、それらを組み合わせた空間の編成形式が生まれる。これと平行し、各地区の大街区の形成が進んだ。

B-1 都市的オープンスペースを囲む編成領域；広場と街路を囲む2種類の編成領域の形成。

明治期の前半（～M40頃）、正門地区ではこの期の最大の特徴である、都市的な街路が導入される。それまでの構内には現病院通りをのぞき、街区を区切り建物の配置を関係づける都市の街路に相当するものはなかった。あるのは田園的なオープンスペースの間を屈曲しながら抜けてゆく園路様の道であった。

大前庭のほぼ中央に正門が置かれ、そこからまっすぐ奥に伸びる軸が大前庭を貫通し、一つの主軸となる。それに直交する軸がひかれ、正門から工と図書館に伸びる斜行する軸とともにほぼ対称形をなす街路網のまとまりを形成し、この地区の編成領域全体としての統合性、一体性が強まる。

さらに広場と街路に分解する、それが2つを組み合わせる「T字形式」へつながる。

この街路網は構内の建物群を関係付け、街区を区切り、それらを統合する。その一端は門を通し構外の都市空間とつながり、構内に都市の街路を引き込むものであった。街路網の密集した大前庭は形態、特性の両面から、構内の

他の領域と対比される都市的な前庭に変化していった。

しかし、この前庭はいまだ都市と庭園の両義の特性があった。屋敷型宮殿の特徴の名残である。この期には正門が整備され、改めて構内全体が煉瓦と鍛鉄の統一的な塀で囲繞され始める。囲われた内部に田園的な領域を囲むという屋敷の特性が現れる。大前庭は門を通して構外と連続するが、構外の都市空間とは緑地帯を挟み接するので、構外の都市空間とは切り離されていることもその別の現れであった。

この大前庭の街路網は、明治期の後半（M40頃～）、工と医などの成長に伴い東と南に伸展するが、それに伴い、一体的にまとまっていた大前庭が、広場と街路などの都市的要素に分解し、それらを組み合わせ再編成する形式が試みられる。

具体的には工・造船の火災後の二度目の新築に伴い、工・本館前に独立的な小前庭が形成されるとともに、既存の法文校舎など工・本館と図書館を結ぶ軸—横断軸に面する建物の区域も含め、いくつかの小街区群が形成される。それらは未完成ではあったが、街路に沿って建物を展開する編成と、街路の終端に前庭的広場を置きそれを囲む様に建物を配置する編成が組み合わせられた形式を暗示するものであった。

この形式は、次に見るよう、弥生門から理・本館に至る街路と突き当たりのロータリーの整備、法文玄関に至る短いアクセス路の新設などでも繰り返される。これをモデル化すると図のようなT字形式として表せる。この形式は、次に見るように理・本館と弥生門でも繰り返された。

こうして大前庭に街路を導入したことは、まず、広場を囲む編成領域と街路を挟むそれとに分解することにつながり、最終的には編成される要素の単位を小さく区切り、前庭的広場と街路のオープンスペースの基本単位そのものを組み合わせることで構内を編成し直すことにつながる。次の内田期にはこの形式は体系化され、広大な構内全体を統合する、成長性に富んだ編成方法となる。

大前庭が都市的整備を施され、周辺の裏の領域と対比をなす。地区全体としては裏を排除し、構内全体としてみれば明確な二領域性が生まれる。裏の領域は次第に後に見るように街路に沿って並んでゆく母屋群の背後に巨大な領域—街区を形成し、正門地区の領域から排除されてゆく。それは逆に言うと、表の都市的なオープンスペースのまとまりを作ることによって空間の編成を行うことであった。偶発的な形態の付属屋は直接の編成の対象からはず

されてゆく。

弥生門—理地区；街路網の展開に平行し、それまでの屈曲した園路的なアクセス路に代わり、弥生門から直線的にアクセスする街路が作られる。これが理・本館に交わるところで正門地区から来る街路と交差し、ロータリーを持つ前庭様のオープンスペースが形成される。軸と小前庭の編成は大前庭で見たT字形式の編成に他ならない。

医・薬の街路；軸の焦点となる建物はなく、T字形式は形成しない。街路としては薬の建設により挟み込まれ、明確に街路としてのオープンスペースのまとまりを形成した。

一空間の編成形式

図4-19'21

表の都市的オープンスペースを囲む編成領域；（正門地区および工、理、医各地区街路及び「T字形式」）広場と街路というオープンスペースの基本単位を囲む編成領域の形成

共通の特徴；前庭、街路の囲繞性（前庭を囲む、街路を挟む、軸の終端を塞ぐ）、都市的特性、建築形態の一貫性（素材、スタイル、スケールなど）、外構等の幾何学的な整序

「大形式」；さらに中心軸の貫通、相称的な街路の成長、裏の領域の排除

「T字形式」；門—焦点となる建物の間の方向性ある軸による統合性、軸貫通する前庭、軸に沿って並ぶ建物（街区群）

B-2 街区の編成領域（工、理、医）；

建物を街路に沿って並べ、表は街路の空間を境界つけるファサードを形成。背後に裏を囲い込む。

工、理、医の各地区がある。ここでは変容の特徴はほぼ共通するので一括して論じる。

街区では街路に沿って奥行きが浅い前庭を持つ建物が並び、あるいは前庭的広場を囲み、背後では裏の領域（庭園・運動場なども含む）が集積され、形成される。ファサードの連続する街路が形成される。宮殿形式の建物を反復し、街路に見立てた構内道路に沿って並べた結果と言える。

工地区では他と比べ奥行きが深いので、小街区のスケールには近い、三側面が表の逆コの字型の建物が並び、大前庭と同様、大街区も街路でさらに細分され始める。街路網と小街区による編成という事態の中で一文字型の宮殿形式が別の型に変化する。

一空間の編成形式

図4-22

外郭の単純性（街路のある側に正面を外に向け建物を反復する、建築形態の一貫性）、内部の無形性、建物前面の表の領域の矮小化と内部の裏のオープンスペースという弱められた二領域性、街路による包囲

C 全体レベル

一変容の特徴

図4-29'32

広大な田園のオープンスペースの中に散開していた自律的な領域は、開発が進むにつれ、全く正反対の、しかし相互に補い合うオープンスペースの編成形式に基づくまとまりを形成する。街路、前庭の広場など都市的空間を囲み、それらを囲む領域と、表は都市的空間を作るファサードを並べ、背後に裏を集積してゆく街区の形成である。

全体は前庭の広場と街路などの都市的オープンスペースと、それに沿って展開した街区からなる。全体の統合は街区を結ぶ都市的オープンスペースにかかってくる。正門を通る軸を起点として、正門地区の大前庭から発し、ループ状に構内を一巡する街路の連続体が形成される。結果としていくつかの街区が正門地区という唯一まとまった表的な前庭的広場をもつ領域を要として接合された構内が形成される。

全体レベルで見ても、表の都市的オープンスペースと裏の領域が明確に分かれ、二領域化が進む。ここでも草創期に見た境界の曖昧な裏表の区別は、表の都市的空間と、庭園的領域、空地などが混然となった裏の領域に分離される。個々の建築に付随する小前庭はほとんどなくなり、街路と独立的な前庭的広場など都市的なオープンスペースに集約される。一方、大街区に内包された裏の領域は、表のオープンスペースに影響しなくなる。

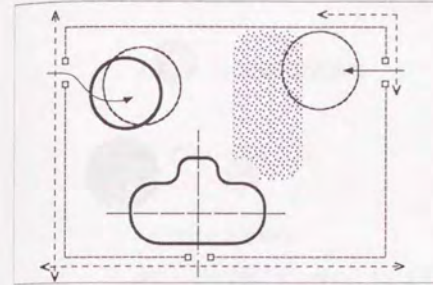
一空間の編成形式

図4-23,24

都市的オープンスペースを囲む編成形式と大街区のまとまりの接合された構成、弱い一体性、構内全体を貫く正門を起点とする街路網

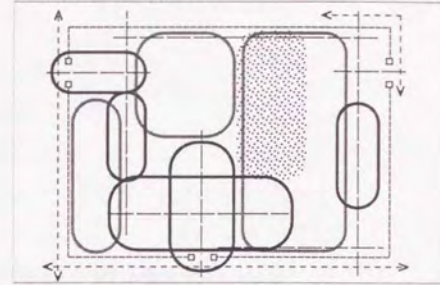
編成領域の配置/明治期前半

4-23



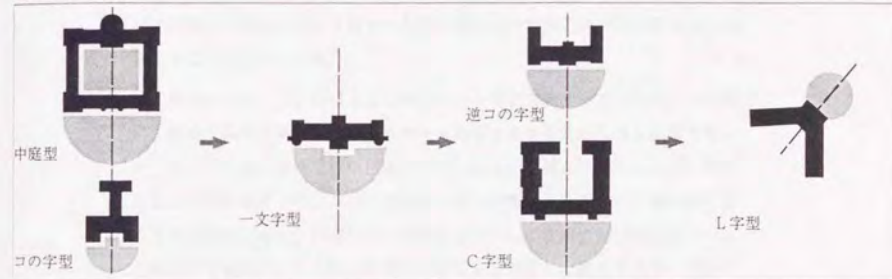
編成領域の配置/明治期後半

4-24



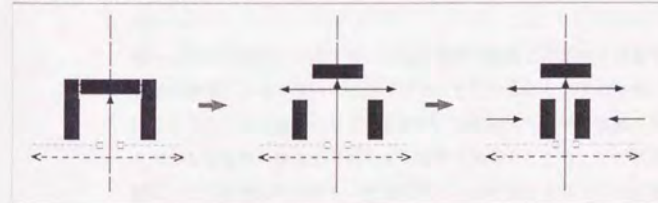
建築型の単純化

4-25



宮殿形式の変形としてのT字形式

4-26





4-3-3 宮殿形式の検証

A 要素レベル

一宮殿形式の単純化

異同としては軸による統合、まとまりの一体性、一貫した建築形態などが共通点としては挙げられる。宮殿形式との最も大きな違いは、一文字型など建物の前庭の奥行きが浅くなり、囲繞性を欠く建築型が使われること、しばしばその背後に建物の翼部で囲われた裏を囲い込む形式の逆コの字型も見られるようになることである。

次で見るように、これらはともに中間レベルで都市的オープンスペースを囲い、明確な輪郭を持つオープンスペースのまとまりを作るために必要であった。奥行きが浅い前庭を持つ正面が並び、あるいは囲むことによって、集合形として単純なオープンスペースのまとまりが形成されやすい。裏の囲い込みも同じ理由である。中間レベルのまとまりとして次第に細分化されていった街路網を表裏の一文字型の宮殿形式によって形成した結果である。街路が三側面に回れば、平面形は自ずと逆コの字型（工・造船ほか）になり、二面であればL字型（理・化学）になる。ともに一文字型の複合形態と見なせる。

図4-25

構内に都市的要素を形成することは建築群の配置と建築型を規定する都市的要素の編成によって構内を秩序づけることにつながる。次の中間レベルで確認するようにその編成のめざすものが、宮殿形式を大学の成長に対応し、より大きな建築群の編成を可能とする翻案であるとしたら、この要素レベルで起こった宮殿形式の変形も、宮殿形式によって規定されていたと言える。

工・本館、理・本館など、主要軸の直交する建物では、前庭が建物群と街路に囲まれ独立的な広場となると同時に、本館の編成領域に統合された前庭でもある。背後に広がる裏の領域を含め統合され、典型的な宮殿形式を構成する。これは先に見たT字形式の主軸の焦点をなす建物で、ただ街路に面する建物（工・造船、理・動物、理・化学、医・衛生、病理、解剖など）と差別化されたと言えよう。

前庭の広場、街路などオープンスペースの基本単位そのものは編成領域ではないので、宮殿形式の適用を検討しない。

B 中間レベル

一表のオープンスペースを囲む編成領域

一正門地区；宮殿の「大形式」の原型的適用と反復的適用、宮殿形式の開放的単位への変形

前半は（～M40）草創期に見た宮殿の「大形式」としての基本特徴を維持しつつ大学の成長に対応し、領域が拡大する。宮殿形式の原型のもつ特徴を保つ変容という意味でこれは原型的適用といえる。それまでの曖昧な特性の「大形式」は、軸性と一体性、囲繞性を強め、表・都市／裏・庭園という二領域性を明確にしつつ、成長する。半ば庭園の特性の前庭を囲む過渡的形態であった「大形式」が、都市的前庭を囲む本来の宮殿形式の「大形式」となる。

宮殿形式との共通点は、大前庭の都市化と囲繞性。門から伸びる主軸の貫通とそれによる統合性の暗示。ゴシック系でまとめられた建築形態など。裏の領域は、隣接する区域で集積される。正門地区を構成する工や法文校舎の裏の領域が拡大したもので正門地区の編成領域はそこまでを含む二領域性を備えたものといえる。

後半（M40～）形成された広場と街路を囲む2種類の編成領域、裏のオープンスペースを囲む領域—街区の領域は、相互に分離され、それ自体としては2領域性を統合する宮殿形式の適用はみられなくなる。「T字形式」は、宮殿形式の前庭の囲繞性、都市性、軸による統合性という基本的特徴において共通する。相違点は、奥の前庭の広場が左右に開かれていることと、そこにいたる軸は街路として絞られることである。この形式はすでに図書館から工・本館へ、弥生門から理・本館に向け伸びる軸でも未完成ではあるが同様な編成は繰り返されていた。この形式が宮殿形式が変形されたものと考えられることは2章で示したとおりである。要素レベルの単純化の変形とこの中間レベルのT字形式への変形がともに集合形としての宮殿形式を形成するという目的で説明される。

図4-26

工、医地区などに見る街路を中心とする領域は、単純化された宮殿形式が街路に面し並べられ、宮殿形式が大規模化される際の一つの典型的なパターンである。これは次の街区の形成と同様であり、機械的に宮殿形式が繰り返されるという点で宮殿形式の反復的適用といえる。

一工、理、医各地区の大街区；宮殿形式の反復的な適用

境界はファサードの連続により明確で、内部に裏の領域あるいは庭園の領域が広がる。領域全体の一体性は強いが、軸による統合性は全く見られない。広場、街路を囲む領域と同様、街区全体としては宮殿形式の適用はない。

C 全体レベル

一中間レベルのまとまりを編成する宮殿形式の緩やかな適用

基本的には正門地区を起点とした成長が顕著であり、そこを要とし、背後、周辺に裏の領域を内包した街区をしたがえるという編成である。これは全体レベルでも宮殿形式の適用を暗示するが、基本的に街区と広場の領域の分離が進んだことにより、宮殿形式の適用はない。

全体レベルの変容に関わるこのほかの特徴も含めると、1) 街路、前庭の庭園など都市的要素の連続体形成、2) 建築群で囲繞される（半）都市的空間、3) 成長の要となる中心的な正門地区の領域とそれを貫通する正門軸の形成、4) 表裏の明確な分離と全体レベルでの二領域性の形成、5) 一貫した建築形態 などである。いずれも宮殿形式の特徴を要素レベルでなく中間あるいはさらに上の全体レベルで実現しようとするものであった。自然地形に基づく制約やそれ以前の展開の跡を引き受けるため、結果として形成された空間は統合的な一体性という点でいまだ弱いものの、全体としては宮殿形式の基本的特徴の多くが現れている。

4-3-4 まとめ

—「大形式」の原型的適用の後、宮殿形式の反復的な適用の継続。分解する都市的空間と街区、それらを再統合する宮殿形式の開放的単位—「T形式」の萌芽

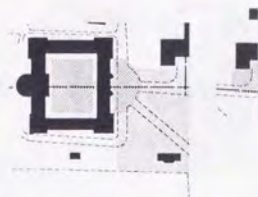
明治期の変容の特徴は、構内全体の中心的な領域である正門地区によく現れている。前半は、「大形式」がその基本的特徴を維持する範囲で変容を遂げる。「大形式」の原型的な適用である。その変容は前庭的な広場から伸びる街路に沿った限定的な展開であった。

この「大形式」という単純な編成形式は、急激な大学の成長に対応し得なくなる。後半は施設の急激な増加に伴い、単純な宮殿形式が構内道路や広場に沿って展開してゆく反復的な適用がなされ、広場の他に街路と街区が形成される。結果として正門地区に見た前庭の広場（中心性のあるオープンスペースの形態）と街路（軸性のあるオープンスペースの形態）が組み合わせられた「T形式」の萌芽が現れた。それは「大形式」が街路によって分解され、それに代わる中間レベルのスケールの統合的なまとまりであった。この形式は正門地区や弥生門—理地区などで反復され、宮殿形式を構内で連続的に展開してゆける編成の基本単位が暗示される。

こうした中間レベルでの宮殿形式を可能とするため、要素レベルでは宮殿形式が変形され、単純化される。表のオープンスペースは簡略化され、それらが集合し中間レベルのスケールで一つのまとまりを形成することが可能となった。

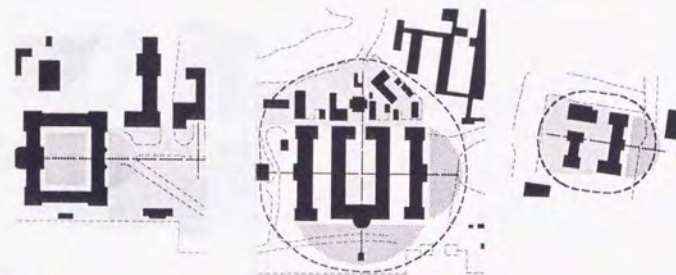
全体レベルでも、各段階で常に宮殿形式に見る特徴を備える方向で変容が進んだことが確認された。要素レベル、中間レベル、全体レベルの各スケールで一貫して宮殿形式が適用され、それに規定され変容が進んだのである。

各レベルの変形は、宮殿形式の基本的特徴を要素レベルよりより上位のレベルで実現しようとする方向で働いていることがわかる。その中でも中間レベルの編成形式が特に宮殿形式の直接的な反映であった。分科大学の集合体とも言える帝國大学として整備されていったこの明治期は、大街区など、未だ大学組織の単位と比較するとスケールオーバーの面は残っていたが、それを分解し、中間スケールのまとまりを様々な場所で形成するため変容を重ねたと言える。



明治28年

1/4,000



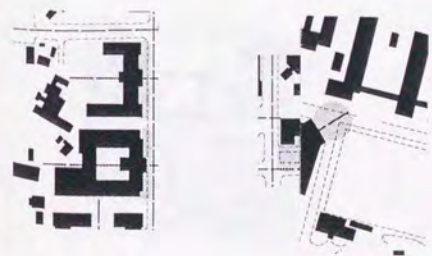
明治36年

1/4,000



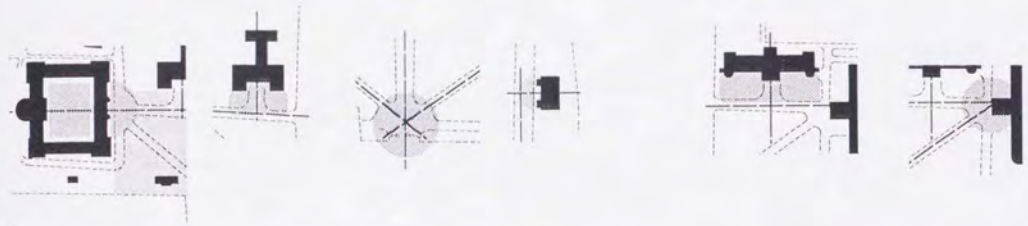
明治40年

1/4,000



大正12年前期

1/4,000



明治28年

1/4,000



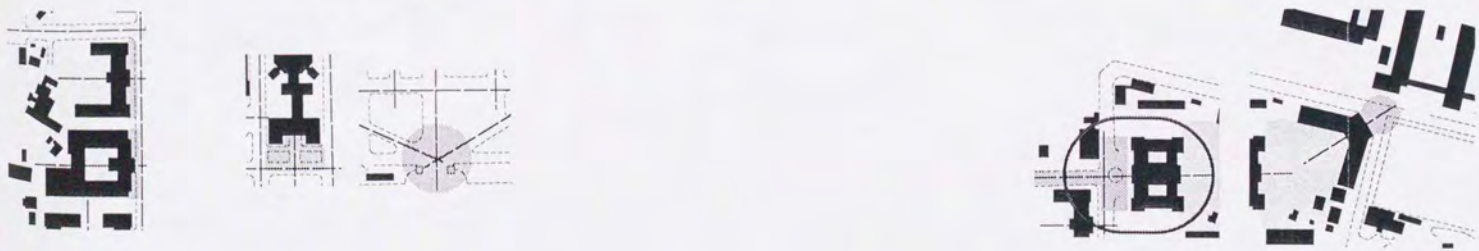
明治36年

1/4,000



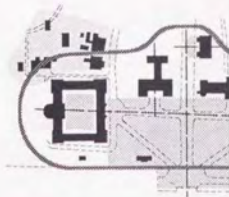
明治40年

1/4,000

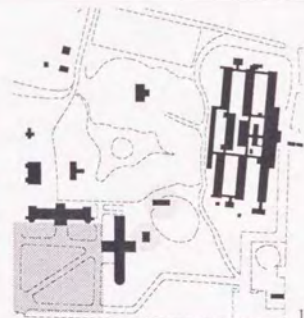


大正12年前期

1/4,000



明治28年



1/6,000



明治36年



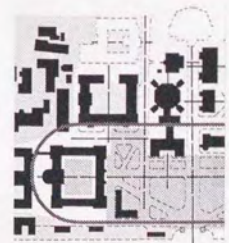
1/6,000



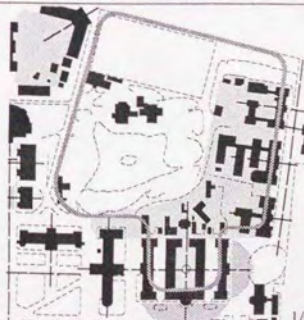
明治40年



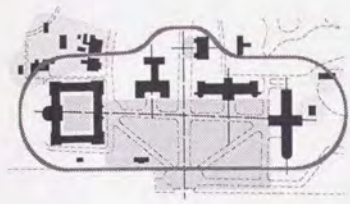
1/6,000



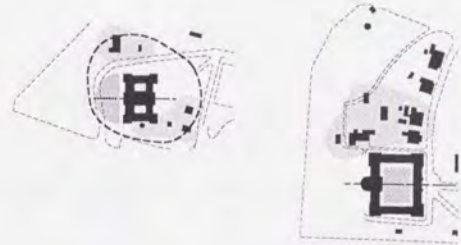
大正12年前期



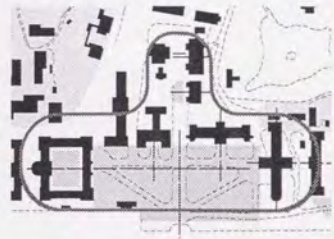
1/6,000



明治28年



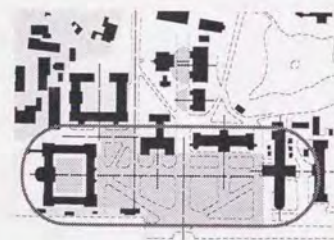
1/6,000



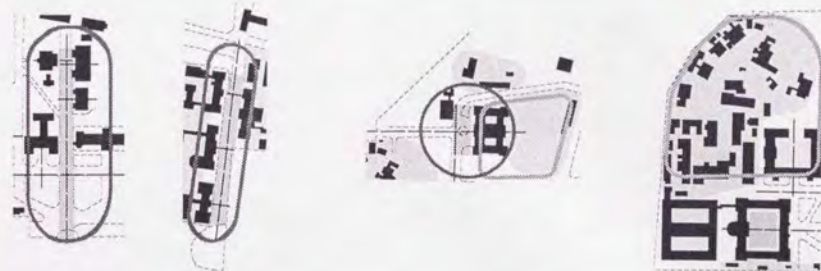
明治36年



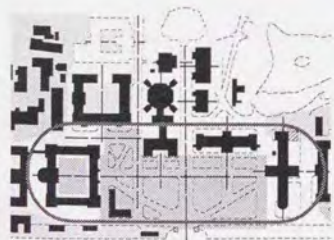
1/6,000



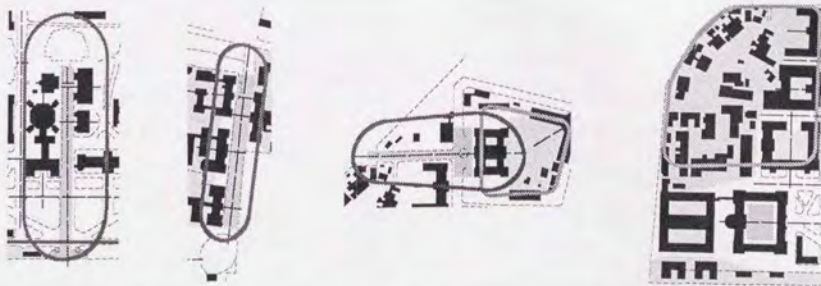
明治40年



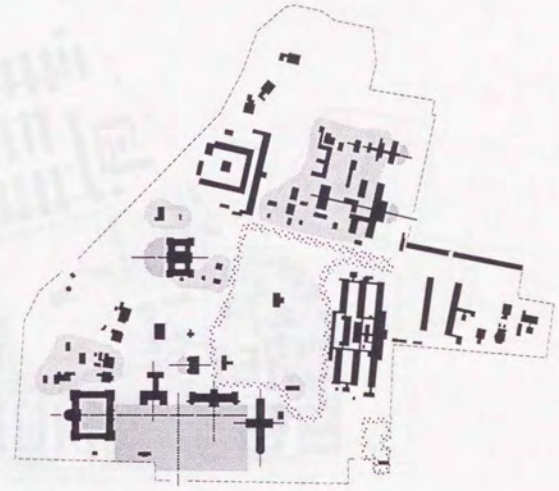
1/6,000



大正12年前期

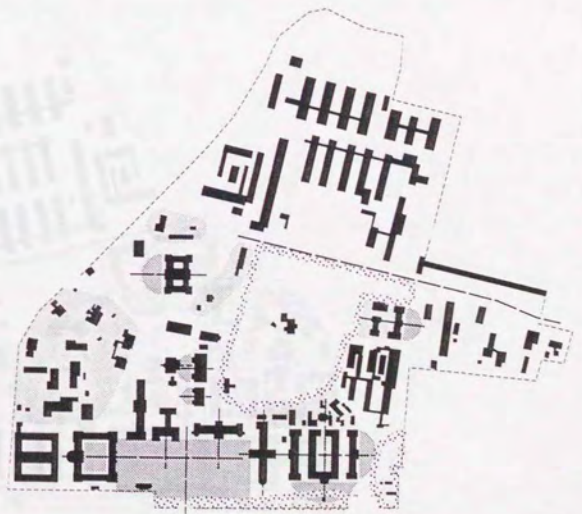


1/6,000



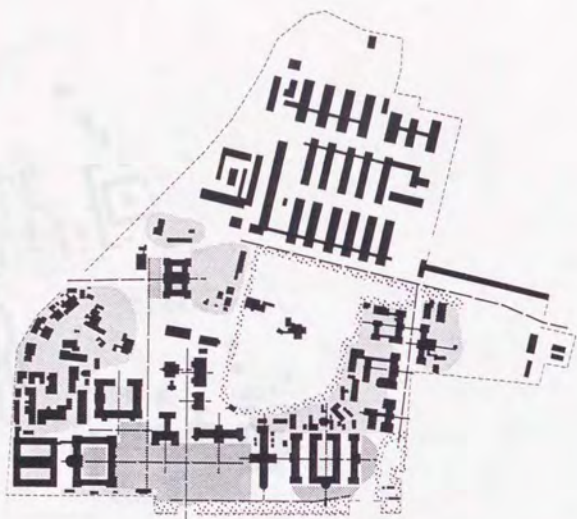
明治28年

1/7,500



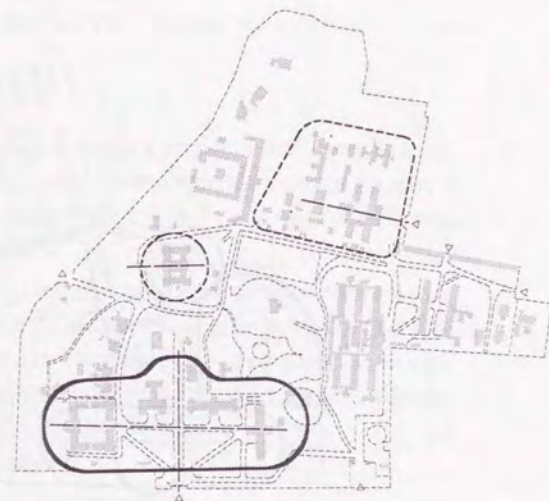
明治36年

1/7,500



明治40年

1/7,500



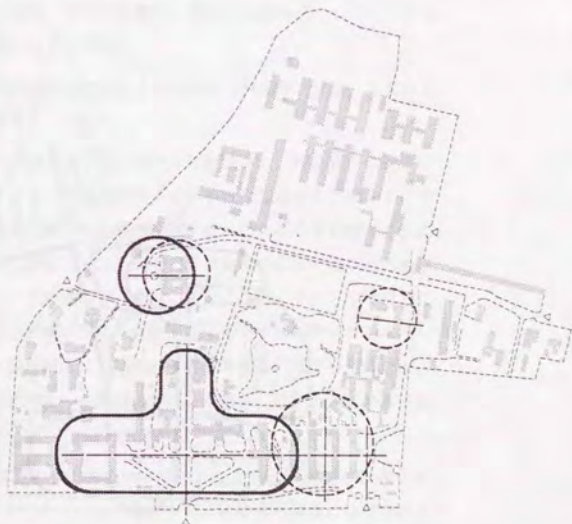
明治28年

1/7,500



大正12年前期

1/7,500



明治36年

1/7,500